

広島女学院大学大学院 言語文化研究科 日本語文化 博士前期課程

067106 重野裕美

修士論文題目

奄美方言における敬語動詞「イモリ」の本動詞から補助動詞への変遷

目次

序章	4
第1章 研究の目的と方法	6
1.1. 研究の目的	7
1.2. 先行研究	8
1.2.1. 奄美方言研究	8
1.2.2. 琉球方言における「イモリ」の位置	10
1.2.3. 文法化研究	14
1.3. 研究方法	16
1.3.1. 対象地域	16
1.3.2. インフォーマントの選定	16
1.3.3. 調査方法	17
1.3.4. 調査期間	18
1.3.5. 敬語動詞「イモリ」の調査過程	18
1.3.6. 質問票と敬語意識アンケート	21
第2章 調査結果の概要	29
2.1. 本動詞用法	30
2.1.1. 「行く」の意味用法	29
2.1.2. 「来る」の意味用法	31
2.1.3. 「居る」の意味用法	32
2.2. 補助動詞用法	33
2.2.1. 補助動詞と複合語の定義	33
2.2.2. 動詞の後項の世代差	34
第3章 「イモリ」の本動詞の意味用法	38
3.1. 「行く」の意味用法	39
3.2. 「来る」の意味用法	46
3.3. 「居る」の意味用法	52
3.4. 動詞が一文内に複数あるときの「イモリ」	56
3.5. 動詞の複合の「イモリ」	59
第4章 老年層の「居る」の補助動詞用法	65
4.1. 「行く」の後項の「イモリ」	66

4.2.	「来る」の後項の「イモリ」	69
4.3.	主体変化動詞の補助動詞用法	72
4.3.1.	「行く」「来る」以外の位置変化動詞	73
4.3.2.	状態変化動詞	74
4.4.	主体動作客体変化動詞の補助動詞用法	75
4.4.1.	位置変化動詞	76
4.4.2.	常態変化動詞	77
4.5.	主体動作動詞の補助動詞用法	78
4.5.1.	自動詞	78
4.5.2.	他動詞	79
4.6.	その他の語に後接する補助動詞用法	81
第5章	中年層の「居る」の補助動詞用法	83
5.1.	「行く」の後項の「イモリ」	84
5.2.	「来る」の後項の「イモリ」	86
5.3.	主体変化動詞の補助動詞用法	88
5.3.1.	「行く」「来る」以外の位置変化動詞	88
5.3.2.	状態変化動詞	88
5.4.	主体動作客体変化動詞の補助動詞用法	90
5.4.1.	位置変化動詞	90
5.4.2.	常態変化動詞	91
5.5.	主体動作動詞の補助動詞用法	92
5.5.1.	自動詞	92
5.5.2.	他動詞	92
5.6.	その他の語に後接する補助動詞用法	93
終章	総括と課題	93
参考文献		99

資料

奄美方言における敬語意識アンケートの結果
2007年11月に行った調査結果

序章

序章

琉球方言は、南北 1,000 k m にわたる島々の地理的広がり、島内における地域間の言語対立が複雑である。琉球方言に属する個々の方言体系を明らかにし、それらを総合的に把握していくことは大きな困難を伴う。

明治期のチェンバレン¹⁾によって開拓され展開した琉球方言は、これまでの研究によって、音韻や語彙、用言の活用体系や文法レベルでの記述には一定の成果が得られたと考えられる。しかしながら、それらが文表現レベルでどのように実現され、どのようなバリエーションと運用規則を持っているかについては残された課題が多い。

卒業論文では町（1997）の調査票を基にして、奄美大島の北部を中心に待遇調査を網羅的に行った。

修士論文では、「奄美方言における敬語動詞「イモリ」の本動詞用法から補助動詞用法への変遷」という題目で、卒業論文で得られた調査結果の中でも頻繁に観察できた敬語動詞「イモリ」を取り上げ、その本動詞と補助動詞の意味用法を世代差の視点から明らかにすることを目的とする。

敬語動詞「イモリ」は共通語の「いらっしゃる」に相当する語で、「行く」「来る」「居る」の尊敬語である²⁾。奄美方言の補助動詞化の現象は、大堀（2005）の定義する「自立性をもった語彙項目が付属語となって、文法機能をにう」変化であるので、典型的な「文法化」の例と言える。本論文の調査方法は、共時態の中で、30代から80代の方言話者における敬語動詞「イモリ」がどのように使用されているかを連続的に追求していったものであり、通時的な観点から結果を得ることができた。また、6回の調査を通して、10代から80代のインフォーマントから文表現レベルの回答を得ることができたため、各世代の言語実態を概観できたと考えている。

今回は、世代差の観点から資料を整理している。調査を行いながら世代差や男女差などの位相面では分けられない、方言習得レベルの段階による違いがあることを実感した。例えば、「イモリ」の意味範囲と世代間の使用差の全体像を捉えたかったため、対者敬語と第三者敬語の区別を考慮しなかったことなどが課題として挙げられる。よりきめ細かい調査法の開拓が必要だと考えている。

言語の変化は、他の方言、言語でも共通の問題である。それゆえ、著しく変化している奄美方言の実態を正確に捉えることで、言語研究、特に言語変遷のメカニズムの解明に寄与できるものと考えている。

¹⁾ Chamberlain, B.H. (1895), *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language* (Kelly & Walsh, Yokohama; 山口栄鉄訳『日琉語比較文典』琉球文化社、那覇、1976)

²⁾ 『奄美方言分類辞典 下巻』（1980）参照。

第 1 章 研究の目的と方法

第1章 研究の目的と方法

1.1. 研究の目的

卒業論文では町（1997）の調査票を基にして、奄美大島の北部を中心に待遇調査を網羅的に行った。

本論文は、卒業論文からのテーマである「現在の奄美方言の使用実態」を明らかにすることを旨とする研究の一過程である。待遇表現の視点から「奄美方言における敬語動詞「イモリ」の本動詞用法から補助動詞用法への変遷」という題目で、卒業論文で得られた調査結果の中でも頻繁に観察できた敬語動詞「イモリ」を取り上げる。その本動詞と補助動詞の意味用法を世代差の観点からその使用実態と、そこから読み取れる変化の過程を明らかにすることを目的とする。

具体的には、第1章で今までの奄美方言の研究の流れを本論文と関係付けながら概観し、研究方法や対象地域について述べる。

第2章では、敬語動詞「イモリ」の全体像を把握するため、2006年8月から2007年11月にかけて計6回行った調査結果の概要を述べる。そこでは、得られた結果を表にまとめて抽象化し、本動詞用法と補助動詞用法に大きくわけ、それぞれ老年層と中年層を比較する。

第3章では、「イモリ」に関わる本動詞「行く」「来る」「居る」を、辞書の意味分類と対応させ、「イモリ」の担う意味範囲を明確にする。また、「行く」「来る」「居る」と「イモリ」の関わりをみていく。

第4章では、老年層において「居る」の意味で動詞に後接する「イモリ」が、「行く」「来る」に後接する場合と、それ以外の動詞に後接する場合とに分け、どのような表れ方をするか確認する。

第5章では、中年層において「居る」の意味で動詞に後接する「イモリ」が、「行く」「来る」に後接する場合と、それ以外の動詞に後接する場合とに分け、どのような表れ方をするか確認する。

終章では、今までの調査結果を踏まえながら、「イモリ」の意義素³⁾は何か、共通語の「～ていらっしゃる」とどのようなところに違いがあるのか、世代間でどのように変化しているのか、問題の所在も含めて現段階の考えをまとめる。また、今後の課題と展開についても言及する。

³⁾ 国広(1979)「現実の音声から抽象された言語単位が音素であると同じ意味で意義素は発話意味の中から抽象された言語単位である。」『意味の諸相』(P11)

1.2. 先行研究

ここでは、本論文に関わる先行研究を「奄美方言研究」「琉球方言における「イモリ」の位置」「文法化研究」の順にまとめる。

1.2.1. 奄美方言研究

琉球方言は大きく、奄美・沖縄方言群（喜界島方言・大島方言・徳之島方言・沖永良部島方言・与論島方言・沖縄本島及び属島北部方言・沖縄本島及び属島南部方言）と先島方言群（宮古郡島方言群・八重山郡島方言群・与那国島方言）の二つに分けられる⁴⁾。奄美方言は琉球方言の奄美・沖縄方言群の下位区分に属する。

明治期のチェンバレンによって開拓され展開した琉球方言は、これまでの研究によって、音韻や語彙、用言の活用体系や文法レベルでの記述には一定の成果が得られたと考えられる。しかしながら、それらが文表現レベルでどのように実現され、どのようなバリエーションと運用規則を持っているかについては残された課題が多い。

奄美方言に関する主なものとしては、奄美大島大和村出身の長田須磨と須山名保子・藤井美佐子による共同の『奄美方言分類辞典』上巻(1981)・下巻(1980)、高橋俊三の『与論方言辞典』(2005)の辞典が挙げられる。『奄美方言分類辞典』は、大和村の方言に基づいた文例が語項目ごとに多く取り入れられ、その語が実際どのように使用されていたかが分かるようになっている。また、岩倉一郎の『喜界島方言集』(1941)は奄美方言の有気音、無気音の区別を初めて正確に記載した方言集である。また寺師忠夫による『奄美方言の文法』(1985)や石崎公曹没後に上村と狩俣が協力して『石崎公曹の奄美のことわざ』(2000)も地元研究者と地元外からの研究者、インフォーマントとの協力の研究として挙げられる。

最近では、岡村隆博より地元の人でも方言を記述できるようにと『奄美方言～カナ文字での書き方～』(2007)が出版された。これは、奄美の人々が「初めて日本の文字で言葉の表記が出来る共通の手段をいま手に入れた（はしがき）」ことにもなり、言葉の伝承や民話や諺の記録や保存に多いに役立つものである。

奄美方言の待遇表現の地域差を扱ったものとしては下野雅昭（1982）に共同研究報告がある。研究方法としては、文レベルで待遇表現を聞き、それを単語さらには音節にまで分析し、そのレベルで地域差を求め最後に文としてまとめて考える試みをしている。また文で得た情報を言語地理学の視点から考察している。そこで扱われている文は「おまえはどこへ行くのか？」で、それを「同じ年ごろの人や目下の人に対する」場合と「校長先生や目上の人に対する」場合とに分け各集落から1名の60歳から80歳までの生え抜きの老年層に調査を行っている。結果、連用形よりも終次形の方が敬意の高い表現であること、長い発話ほど丁寧であることからモーラの数の比較より、北大島より南大島の方が待遇価値の高い表現を使用しているとの指摘がある。また、語形についても南大島の方が古

⁴⁾ 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編(下-2)』「琉球列島の言語(総説)」(上村幸雄)参照。

い形に近いということも述べられている。

『言語学大辞典 第4巻 世界言語編(下-2)』(1992)には、上村幸雄と津波古敏子による琉球列島の言語についての詳しい説明がなされ、琉球方言を概観できる。

奄美方言のテンス・アスペクトを扱った研究には松本泰丈(1993)がある。松本は「さまざまなすがたで、ココに、イマ、アクチュアルにあらわれているデキゴトと、それをハナシテが目撃していることを、ある文法的なかたちに表現してつたえているとき、そこにいいあらわされている意味的な内容」を「メノマエ性」と呼び奄美方言において論を展開している。その際「シトル形」「シテアル形」のうち「シテアル形」は共通語と違い、有情主語でも言い表すことができること、人称に制限があり、1人称の話し手自身の行為は「シテアル形」では現在につながる問題をうける形での過去の行為以外は言いにくいこと等を指摘している。

工藤(2007)では、言語接触の視点から標準語や方言、ブラジル移民の使用する「コロニア語」のアスペクトを「動的体系としての言語」としてまとめている。その中で、「ウチナーヤマトウグチ(沖縄大和言葉)」について触れられている。「ウチナーヤマトウグチ」とは沖縄の若者に使用されている方言と共通語の中間方言である。奄美方言にも「トン普通語⁵⁾」「奄美普通語」と言われる中間方言が存在する。言語接触という面からも、奄美方言においても共通する点があると思われるので、以下に引用する。

以上のような首里方言を話す人々が、標準語(普通語)との二言語併用を行い、その過程で、西日本方言の影響も受けながら生成してきたのがウチナーヤマトウグチである。

①音韻面：三母音から五母音へのシフト

②語彙面：オル相当の「ヲウン」から「イル」へ、「アン」から「アル」へのシフト

③文法面：「先生ガ窓開ケテタ」〈進行〉

「先生ガ窓開ケテアッタ」〈結果〉

「先生ガ窓開ケヨッタ」〈目撃〉

(中略) こうして、ウチナーヤマトウグチは、〈形式〉上は標準語や西日本方言と同じになる一方、〈意味〉上は、首里方言を引き継ぐというハイブリットなかたちになっている。標準語の規範性を抜きに考えれば、〈目撃証言〉であることを明示できるのはコミュニケーション上極めて有効である。また、標準語のようなヴォイスを絡み合ったシテアル構文よりも、動作主体を明示できる方がコミュニケーション上有効な場合も多い。言語接触による文法的変化が創造的行為であると言われるのはこのような意味においてであろう。

⁵⁾ 奄美では、長年の方言との関わりの中で、共通語と方言の二重の言語生活を営んでいる。鹿児島では、方言と訛りの入っている共通語のことを、卑下して「カライモ普通語」と言っているようである。イモには田舎者の意味もある。また、奄美ではイモのことをトンまたはハンスと言うので「カライモ普通語」を「トン普通語」と言い換えたものか。始めは自嘲的な意味で使用されていた「トン普通語」も、現在では一般的に使用されている。

松本(1993)、工藤(2007)にも指摘があるように、琉球方言には存在動詞「ある」が有情主語でも言える。それは、その主語の行為の結果が痕跡として残っているか、確実に類推できる場合である。この存在動詞「居る」「ある」の使い分けも現在「メノマエ性」という言葉をキーワードに研究されているが、本論文では「イモリ」という「行く」「来る」「居る」の敬語動詞について扱うため、「居る」「ある」の常態については言及しない。しかしながら、「イモリ」を使用せず「ある」に敬語助動詞や丁寧語を付加して敬意を保つ文例が数例見られる⁶⁾。その際は、語の構成を述べるだけに留め、存在動詞について詳しく分析することは避ける。

1.2.2. 琉球方言における「イモリ」の位置

琉球方言の敬語法についての研究は、金城朝永(1931)の「南島方言に於ける敬語法」を始め、岩倉市郎(1932)「喜界島に於ける敬語法」や仲宗根政善(1987)『琉球方言の研究』の中に収められている「宮古および沖縄本島方言の敬語法―「いらっしゃる」を中心として―」が挙げられる。

本論文で扱う敬語動詞「イモリ」について、辞書による意味やその起源について、先行研究による説明をまとめる。また、琉球方言においての敬語動詞「イモリ」の位置についても触れる。

まず、『奄美方言分類辞典 下巻』には、敬語動詞の「イモリ」の意味として「いらっしゃる。行く、来る、居るの尊敬語。」とある。

仲宗根(1987)の中の「宮古および沖縄本島方言の敬語法―「いらっしゃる」を中心として―」に、琉球方言で共通語の「いらっしゃる」にあたる敬語動詞を、宮古平良西里の方言を中心にまとめられたものがある。敬語動詞とともに、それらが補助動詞としてもすでに使用されていることについても触れられている。少々長くなるが引用したい。224 頁から 226 頁までと 261 頁の二か所を続けて引用する。

(P 224～226)

(2)「来る・行く・居る」の敬語と補助動詞

この方言(=今帰仁村与那嶺方言)の「来る・行く・居る」の敬語は、平民は「もールン (/ʔimooruN/)」、士族は、「めんセン (/ʔmeNseN/)」、「めんソールン (/ʔmeNsooruN/)」である。

尊敬補助動詞は、平民は、「ンセン」、「ンソールン」で、士族は「ミセン」、「ミソールン」で、例えば「ハチンセン」「ハチンソールン」「ハチミセン」「ハチミソールン」(書きなさる)のように言う。

⁶⁾ 例) om(73): センセーヤ イマ ガッコーッチ イキカタ アリョランカイ。〈「ある+敬語助動詞」: 傍線〉
(先生は 今 学校に 行く途中で あられないかい。)

「もールン」は、「うモーイン」(今帰仁村字古宇利)、「もーユン」「もーイン」、「モ
ーユン」、「モーイン」、「モーン」などと変化して、広く沖縄本島およびその属島に
わたり、平民の敬語として用いられている。なお、海を越えて、奄美大島につな
り広がっている (傍線：筆者)。奄美大島の例をあげると (与論島立長は「わーリ」
/?waari/〈いらっしやい〉で、「おわれ」に当たる。多良間・鳩間と同じ)、

沖之永良部和泊町手手知名	もーユン
沖之永良部和泊町瀬利覚	もーリヨー 〈いらっしやいよ〉
徳之島町亀津南区	モ ^リ ヨー 〈いらっしやいよ〉 (^リ / ^{ri})
喜界島阿伝	ウモーリ 〈いらっしやい〉
大島本島笠利町赤木名	モーレー 〈いらっしやい〉
瀬戸内町赤木名	ウモー ^リ 〈いらっしやい〉

なお、沖縄本島の影響を受けた八重山民謡の中にも、「^{オオクニ}大国ヌ 弥勒 八重山ニ
イモチ」などと用いられている。

このように広く沖縄本島・奄美大島に広がっているが、宮古方言にはない。
与那嶺方言の「もールン」のアクセントが、語頭の一音節が高く、他に類例のない
ことからしても、複合語であることがわかる。諸方言の語頭に、?im' ?um' ?m のあ
るところからして、前接語は、?imi か?umi であろう。後接語は、おわる〈「おはす」
のラ行四段化した動詞〉である。

士族の敬語の「めんセン (/?meNseN/)」、「めんソールン (/?meNsooruN/)」は、
「いみあり」から変化したイメーン (イメン) にさらに「めしあり」「めしおわる」
から変化した補助動詞ミセン・ミソールンが結合して出来たのもである。語尾の「ン」
に就いては別に考える必要がある。

尊敬補助動詞の「ミセン」「ミソールン」は、もともと独立動詞で、それが次第に
補助動詞として用いられたことはあとで述べる。

「もールン」の前接語を「いみ」と仮定すれば、与那嶺方言敬語は、「いみおわる」
「いみあり」「めしおわる」「めしあり」を基本としていると言えよう。

与那嶺方言の現在に至った通時的変化過程を文献によってあらましましたどって見た
い。

本土の「おはす」が琉球方言でラ行四段化したことや、本土の「おはす」と琉球
方言の「おわる」との言語史的関係については、今のところ明らかではないが、琉
球方言の敬語の歴史を考え、本土方言と琉球方言との交渉を知る上で、これを明ら
かにすることは極めて重要な課題だと思う。

(P261)

おもろに、敬語として、もっとも多く用いられた尊敬動詞「おわる(「居る・来る」
の敬語)」と、それが、補助動詞として、用いられた「よわる」「わる」の活用を

主として述べて来た。おもろでは「おわる」はまだ尊敬の程度を高く保って多く用いられていた。「めしよわる」は、おもろでは、補助動詞として用いられた例はないが、金石碑文の例からして、当時、尊敬の程度の高い敬語として用いられたであろう。「めしよわる」が、補助動詞として用いられるようになり、「よわる」（「わる」）は、次第に尊敬の程度を減じ、組踊などでは、第一人称や目下に対して用いられるようになり、沖縄本島では、ついに使われなくなったと推測される。

現在、沖縄本島、/misoojun/《めしおわる。召し給う。独立動詞としても、補助動詞としても用いる》と/□imoojun/ (/□umooojun/)《居る、来る、行くの敬語》の中に熟合して、「おわる」は残存している過ぎない。

仲宗根によると、「イモリ」はもともと「居る」「来る」の敬語であった「おわる」が複合した形で沖縄から奄美まで広がった、と考えられている。また、沖縄・宮古・八重山各方言における敬語の比較を表にまとめている。以下は尊敬語の「行く来るの敬語」「居るの敬語」の項目のみを抜き出したものである。奄美方言の敬語動詞「イモリ」は平民の敬語である「もールン」と同類だと思われる。

「表 7 沖縄・宮古・八重山敬語比較表」からの抜粋 （P 235 参照）

		西里		多良間		鳩間	与那嶺	
		士族	平民	士族	平民	平民	士族	平民
尊敬語	行く来るの敬語	ムミヤー ^ス		ワー ^リ	オール ^シ	めんセン	もールン	
尊敬補助動詞 (助動詞)		ウラー ^ス				めんソールン		

仲宗根(1987)では「イモル」は平民の敬語「もーユン」が沖縄から、奄美まで広がっていることを述べ、「行く・来る・居る」の敬語である「もーユン」は「行く・来る」の敬語である「おわる」が熟合して残存している状態であると説明している。

岡村(2007)でも、奄美の挨拶言葉の項目で「イモル」についての説明がある。喜界島・大島・徳之島・沖永良部・与論の共通語の「いらっしゃる」にあたる語のバリエーションや語の構造がそれぞれ詳しく記述・考察されている。以下に引用する⁷⁾。

(P 104～105)

⁷⁾ 岡村氏はカタカナ表記として、硬い発音には「リ」の記号を付け、柔らかい発音には「ㇿ」の記号が付いている。中舌母音を伴う文字は、拗音のように二文字にし、キやエを小さくして文字を作っているが、今回の筆者の引用ではキやエは大きさをそのまま使用している。

(2)来てね・さよなら・また明日

いらっしやい 〈喜界〉オーレ。ウモーリ。ヤーカイノボリ。

〈大島〉イモルㇿ。イモルㇿー。イモルㇿ。イモールㇿ。イモルㇿンショールㇿ。

イモルㇿンショールㇿ。'モールㇿ。イモリンショールㇿ。アガテㇿ'モルㇿ。

オモルㇿンショールㇿ。オールㇿ<与路>。オーチㇿトルㇿ。

〈徳之島〉'モーロ。'モールㇿ。'モンショルㇿ。イッチㇿ'モーロ。'モーチㇿタボーロ。クワー。クー。コー。

〈沖永良部〉'メンショーリ。'メンソーレ。

〈与論〉'ワーリ。'ワーチタバリ。'ワーチャンミー。キチャンミー。'ワーチャイヤー。

これらの言葉は、まだ健在である。

イモーリ・ウモーリ・'モーリ・'モルㇿ・イモールㇿ・ウモールㇿ・オールㇿ・'モールㇿは同根の言葉で、喜界・大島・徳之島にある。

イ・ウ(=オ)は、古語の接頭語である。イは、主として用言に冠して、語調をととのえ、意味を強める働きをする。オ<島口ではウになる>は、多くは名詞、時には用言について尊敬の意を表す。硬い発音の'モは、語頭の狭母音 i が消滅した痕跡を留めているのである。

モーリ(ルㇿ)とは、回れである。昔、大家とか立派な門構えの家に出入りするとき、気の置けない者へは、回れやと奥の間へ招じ入れたであろう。回れとは歓待である。有難い言葉である。

それが、いらっしやいの意味となったであろう。こう考えるのはごく自然である。普通の庶民の家は、奥などありはしない。もともと回る所はないのだから、来いよ・入れや等であっただろう。それは、普通の表現として今に残っている。'メンショーリ・'メンソーレは、沖永良部島であるが沖縄のメ(メ)ンソーレと同じである。共通語との対応の形が、はっきりは見えて来ないが、メンは**参る**のメールではないか、と推測する。

この対応ならば**参り+候**へですっきりする。

メの音が柔らかい所は、そのままメーリであり、硬い所はイメーリで、大島や徳之島のイモールㇿと'モールㇿの違いと同じである。

イメーリが、イ音の脱落で語頭のメが'メとなっただけである。

'ワーチタバリは与論だけであるが、対応は古語の**おはす**である。**おはして+給へ+あれ**か、または、**おはして給へ**であろう。

これは、相当に尊敬度の高い表現である。

岡村は、「モーリㇿ」を「回れ」からだとし、「歓待」の表現であるとする。

仲宗根の考える「おわる」からの派生と考えとは異なるが、本論では語源までは言及しないため、それぞれの論を引用するに留める。しかしながら、語源を考えることは「イモ

リ」の意義素を考える際の手がかりとなるため、今後の課題とする。

論から少々外れるが、筆者も、調査を依頼した際に「それなら、回っておいで。」という表現を何度も聞いた。

最初は耳慣れない表現であったため、「回り道をしておいで」という意味なのかと考えたが、後から聞いてみると「どこかへ行くついでに、私の家に遊びにおいで。」という表現であることを教えていただいた。町(1984)の中に「相手本位の言いかたによる敬態表現」の項目がある。「相手本位の言いかた」は南九州と同様、南島方言に広く見られ、「たとえば「～サセテイタダク」のように、行為の主体を相手の側に位置させることによって、その表現の待遇品位を高める言いかた」のことであると説明されている。このように「直接的な自己の行為の言いかたを避けて、間接的な受身形で表現すれば、やわらかいもの言い」となり「ていねいさ」に通じるとしている。南島方言には、このように、受身形にするだけでなく、「回っておいで」のような言い回しにも、「相手本位の言い方による敬態表現」が反映されているのだろう。

1.2.3. 文法化研究

言語変化は言語のあらゆる面で起き、世界の言語変化においては一方向性が見られるという指摘が諸研究でなされている。大堀（2005）氏は「それまで文法の一部ではなかった形が、歴史的変化の中で文法体系（形態論・統語論）に組み込まれるプロセス」すなわち「脱語彙化(delexicalization)」を「文法化(grammaticalization または grammaticization)」とし、より具体的には「自立性をもった語彙項目が付属語となって、文法機能をにうようになる変化（メイエを始めとする緒家の定義は、Hopper and Traugott 2003⁸⁾に詳しい）」が、典型的な文法化であると説明している。さらに「通時的変化の結果として現れたもの」に限り文法化としている。そして拡大したケースとして、元々自立形式でなくても、使用範囲が広がって機能の多様化が起きる多機能性の発達、および特定の語形に限定されない構文の発達を検討している。

また大堀（2005）では、以下のように文法化の基準を 5 つ示している。

〔文法化の 5 つの基準〕

基準 1：意味の抽象性。

基準 2：範列の成立。ここでいう範列（パラダイム）とは、代名詞や格助詞のように、一定の文法機能を表し、相互に対立する少数のセットである。

基準 3：標示の義務性。特定の形態素による標示が、ある機能を表すために要求されることが義務性である。

⁸⁾ Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth Closs (2003) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press. [初版邦訳『文法化』九州大学出版会]

基準4：形態素の拘束性。これは「自立語から付属語へ」という変化そのものである（メイエの言い方を引けば *mots principaux* から *mots accessoires* への推移）。すでに見たケースでは、どれもこの変化が起きている。それは文法化される形が動詞や名詞といった元来の語彙カテゴリーの性質を失うプロセス——三上（1972）のいう「品詞くずれ」——と密接に結びついている。

基準5：文法内での相互作用。

これは文法化が進んだ場合にはどうなるかを規定したものと言えるが、それとは別に、ホッパーは文法化に伴って見られる、変化の「兆候」とでも言うべきものを①層状化（layering）②分岐（divergence）③特化（specialization）④保存（persistence）⑤脱カテゴリー化（decategorization）の5つを挙げている（Hopper1991）。それはある表現が慣習化するさいの一般傾向であり、文法化だけでなく語彙化においても、兆候を示すことがあるとしている。

渋谷（2005）は、文法化の現象の全体像を捉えようとする際には「起源」「推移」「移行」の3つの側面を把握することが必要と述べている。本論は、「起源」については、先行先行研究をまとめるに留め、実際世代間で「イモリ」がどのように「推移」し、また「移行」していくのかを追って行く流れになる。

日高（2005）は、文法化の現象を捉える研究の中では「一つの言語の歴史的変遷の過程を見るだけでなく、同時代に存在する同系統の言語（方言）を比較・対照」することによって「変化の方向性」「変化の進行の度合い」を視野にいれることは一般化可能な手法として試みる価値のあるものであると述べている。また、日高氏と同様文法化に関する共時的な研究の意義を三宅（2005）は「①同一形式における内容語的な用法と機能語的な用法との連続性、及び両者の有機的な関連性を捉えることが可能になること、②文法化語の機能語としての意味・文法機能を説明する際に、文法化前の内容語としての意味からの類推が可能になること、の2点（ただし②は①の帰結）に求める、ことに集約される」としている。

本論文では、敬語動詞「イモリ」一語が世代間において変容していく様を考察する。危機言語である琉球方言は、これまで音韻や用言の活用体系レベルではある程度研究され一定の成果を上げている。しかしながら、本論のように「敬語動詞」に注目し、本動詞と補助動詞の意味用法を文表現レベルで、世代差に焦点をあてた研究は、管見の見あたらない。これはある共時態の中で世代間の変化を追っていくため、通時的な研究にもつながっていく。また、変化が起こる前の世代と変化をし続けている世代の資料を得ることができ、変化の原因がどこにあり、表現のどの部分から起こしていくのかの考察ができる。また、敬語を聞き手の違いによってどのような範囲に使用するかという意識面も含めて考察することで、よりインフォーマンとの生活実態に近い立体的な報告ができるものと思われる。

1.3. 研究方法

ここでは、本論文の調査に関する詳細を、対象地域・インフォーマントの選定・調査期間・表記法・調査法・質問票作成の経過・質問票と敬語意識アンケートの順に説明する。

1.3.1. 対象地域

奄美大島は、鹿児島から南へ 380km、沖縄本島から北へ 300km の洋上に浮かぶ年間平均気温が 21.3 度の亜熱帯気候の島である。行政区画上は鹿児島県に属する。周囲 405km、面積 719.82k m²で、北から順番に笠利町・龍郷町・名瀬市・住用村・宇検村・瀬戸内町という 7 市町村であったが、平成の大合併により笠利町・名瀬市・住用村が奄美市に、その他の町村はそのままの地名に留まった。しかしながら、方言区画が(旧)名瀬市と(旧)住用村を境に北大島方言、南大島方言に分かれる。今回の調査は、龍郷町を中心に行ったが、(旧)笠利町出身者にも数名調査している。よって、奄美市笠利町のことは「(旧)笠利町」として扱う。

また、本論文の調査の中心地であった、龍郷町と(旧)笠利町について紹介する⁹⁾。

龍郷町は、鹿児島県から南西に約 380 km以南に点在する奄美群島中、大島本島の北部に位置し、東経 129 度 35 分、北緯 28 度 25 分の地にあつて、西南部は南北に連なる山系で名瀬市と接続し、東北部は龍郷湾を隔て笠利町と相対し、陸地は赤尾木地峡を経て笠利町に接している。東南部は太平洋に面し、西北部は東シナ海に面す。山脈は急峻な長雲山脈とじょうご山系が南北に連なっている。全体の人口は 6,110 人で、そのうち男が 2,922 人、女は 3,188 人である。世帯数は 2,758 である。

一方、隣接する(旧)笠利町は、『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』(1983)によると、昭和 36 年(1961)1 月 1 日、笠利村に町制施行して成立した。面積は 58.97 k m²で、「李朝世祖実録」に加沙里島、琉球の「おもろさうし」第 13 卷に^{ひる か さ り}辺留笠利とあり、琉球王朝統治時代・鹿児島藩時代の^{か さ り ま ぎ り}笠利間切による。全体の人口は 6,736 人で、そのうち男は 3,201 人、女は 3,535 人である。世帯数は 3,086 である(2007 年 12 月 31 日現在)。産業としては紬とさとうきび農業が盛んで、奄美空港があり遺跡やあやまる岬など名所があることから観光業も最近は多くなってきている。

1.3.2. インフォーマントの選定

本論文では、鹿児島県大島郡龍郷町浦集落を中心に、敬語動詞「イモリ」の実態調査を 10 代から 80 代のインフォーマントに対して行った。

今回の調査では、「イモリ」の意味用法の全体像を捉えることを明らかにしたかったため、

⁹⁾ 『町勢要覧 2006 鹿児島県龍郷町 癒しのまち たつごう』より「位置・地勢」参照。

主に第一言語が方言ベースのインフォーマントに調査依頼をした¹⁰⁾。その際、生え抜きのインフォーマントであることが望ましいが、中年層以下に至っては就職や進学のため島から出た経験がない人を見つけることは困難である。従って、言語形成期は島で過ごし、一旦は島外で住んだが、現在は島に戻って暮らしているインフォーマントを含めた調査資料となっている。中年層でも、若年層と同じレベルの「奄美共通語」「トン普通語」を話し、方言をほとんど理解しない人を今回は調査対象から除外しているため、本当の意味での言語使用実態とは異なることになる。本論は方言話者による敬語動詞「イモリ」の使用実態を考察することになる。

インフォーマントの表では、氏名は表示せず、性別、年齢、出身地、職業を載せている。また、簡単な敬語の意識調査アンケートにおいては、配偶者の有無や両親の出身地を加えて聞いている。

また、今回敬語意識調査アンケートより、非身内の年上なら中年層でも敬語を使用するため、身内敬語を兄姉・両親・祖父母に分け、兄姉・両親・祖父母に対して敬語を使用する人と、両親・祖父母には敬語を使用するが、兄姉には使用しない人へと分けたところ、50代と60代で境目が現れた。よって、60代から80代を老年層、30代から50代を中年層、10代から20代を若年層として本論文では扱うことにする。omは老年層男性、ofは老年層女性、mmは中年層男性、mfは中年層女性を表す。

その際、年齢・性別が同じ場合は、a.b.c…を年齢の後に付加して区別することにする。

例) 80歳の女性 : of(80a)

なお、文例の表記は簡略化カタカナ表記で表し、共通語訳を下に付ける。当該地域にとって声門破裂音は、語頭の母音、半母音、およびはねる音の前などに現れ、声帯のゆるやかな振動によってたちあがる、声門破裂音をともなわないものの語頭と意味を区別する重要な働きを持つ¹¹⁾。本論文でも、当該地域の発音を正確に再現するため、音声記号で表す必要があるが、今回は「イモリ」の意味用法の表れ方に重点を置くため、筆者の内省による簡略化カタカナ表記で記述する。しかしながら、語の複合において、イントネーションやアクセント、声門破裂音の表れ方が手がかりになる場合も考えられるので、今後の課題としたい。

敬語動詞「イモリ」は、分かりやすいように傍線を引いている。

1.3.3. 調査方法

調査は、以下の条件で行った。

話者 : 20代から80代の龍郷町出身

¹⁰⁾ ここで言う「方言ベースのインフォーマント」とは、敬語動詞「イモリ」を日常的に目上に対して使用している人である。

¹¹⁾ 例) はねる音を「N」、声門破裂音を「?」、ゆるやかな声たてを「'」で示すと、次のような意味の区別になる
?utu「音」: 'utu「夫」、?i「胃」: 'i「絵」、?ja「おまえ」: 'ja「家」、?wa「豚」: 'wa「輪」、?Nni「稲」: 'Nni「胸」。『言語学大辞典』参照。

第三者：校長先生または話し手が敬語を使用する目上の人

聞き手：親しい友人

質問調査票をあらかじめ用意し、その文例を普段使用している言葉でどのように表現するかをインフォーマントに答えてもらった。また、質問文がインフォーマントの生活実態になじみのないものや、単語が連想しにくい場合は、インフォーマントに合わせながらも動詞の部分だけを変えずに質問をした。そのため、得られた回答は質問票とは違うものが多数あるが、本論文は敬語動詞「イモリ」の意味用法を把握することとが目的であるので、支障はないものとする。

調査項目以外で注目すべき教示や文例があれば〈補記〉として記録した。

また、得られた回答は全て扱うものとする。

1.3.4. 調査期間

2006年8月、2007年1月・3月・4月・8月・11月の計6回の調査を約2年間に渡り行った。調査期間の詳細は以下の通りである。

2006年8月18日～28日

2007年1月2日～4日

2007年3月10日～24日

2007年4月18日～23日

2007年8月10日～30日

2007年11月19日～23日

本論の調査は、回を重ねるごとにその前の調査結果の補充・補完したものである。よって、全部の調査において協力を得られたインフォーマントもいれば、一度のしかも限られた質問調査しかできなかったインフォーマントもいる。よって、一人ひとりの調査結果にかなりのばらつきがあるとともに重なる部分もある。

1.3.5. 敬語動詞「イモリ」の調査過程

修士論文のテーマである敬語動詞「イモリ」の全体像を把握するために、2006年8月から2007年11月にかけて、計6回調査を行なった。それぞれの調査目的や過程、得られた結果を簡単にまとめる。

2006年8月 待遇表現調査

卒業論文では、町(1997)の調査票を基に、奄美方言の待遇表現を網羅的に調査した。その際、対者敬語・謙譲語・丁寧語・第三者敬語・身内敬語に分けたが、動詞が各項目を通じて動詞を統一して調査していなかった。そこで、「イモリ」に関する意味の一つである「行く」に絞り、若年層・中年層・老年層から男女各1名に対して調査を行なった。

結果、方言には男女差は見られず、若年層の男女と中年層の女性は共通語や中間方言で答え、中年層の男性と老年層の男女は方言で答え、中年層の男性と女性の間で文型の境界

線が確認できた。また、聞き手が「親しい友人」の第三者敬語の項目において、中年層の男性に「イジモットー」という表現が表れた^{1 2)}。老年層は、「モシモットー」の回答が多数であったため、「イジモットー」は個人差で敬語動詞「イモリ」が中年層において「居る」の意味で補助動詞化したものだと考えた。

2007 年 1 月 敬語動詞「イモリ」における補助動詞用法の世代間の使用範囲

前回の調査で「イジモットー」が 1 例のみ現れた。それが中年層男性の個人差なのか、中年層に広がっている用法なのか、第三者敬語のみに現れる表現なのかを明らかにするため調査を行った。

ここでは「イジモットー」の広がりを把握したかったので、中年層と老年層に絞り「行く」「来る」「居る」の本動詞用法を 3 つ、「行っている」「来ている」の 2 つの補助動詞用法を「完了・結果」の意味に限定し、計 5 つの質問文を作成した。また場面設定として、第三者を「目上」、聞き手を「親しい友人」と「目上」に分けた^{1 3)}。

その結果、聞き手が誰でも「イジモットー」は第三者敬語として使用され、方言話者である 30 代から 70 代まで男女差関係なく使用されていることが分かった。「来ている」にも「キチモットー」のように「動詞の常態＋敬語動詞イモリ」の形態が使用されることも確認できた。

また、「モシモットー」という「イモリ＋イモリ」の形態が 50 代男性と 70 代女性に表れた。そして、場面設定で中年層になると親しい目上の人だと「イモリ」を使用しないインフォーマントも現れてくるため、ただ「目上」と設定するのをやめ、「校長先生」または「話し手が敬語を使用する相手」を想定するように次回の調査から注意した。

2007 年 3 月 尊敬動語「イモリ」の「行く」「来る」「居る」における使い分け

「イジモットー」がどのようなときに使用されるか、その範囲を「イモリ」を敬態の本動詞として使用する「行く」「来る」「居る」の意味を中心に、対者敬語・第三者敬語に分け調査を行った。また、「明日」「今日」「昨日」の時制に分け、目上・目下に対してどのように使い分けるかについても調査した。

結果、「イジモットー」は、対者敬語・第三者敬語共に表れ、共通語の「～ている」表現と似ていることが分かった。しかし「テ形」を介さない「動詞の常態＋敬語動詞」の形である。また、時制では形態が左右されなかったため、「完了・結果」「進行」というアスペクトの問題であると考えた。

^{1 2)} 質問文：第三者敬語「〇〇（近所の目上）なら、今海に行ってるよ。」

回答：mm（当時 56）「〇〇アニ ワ ナマ ウミッチ イジモットー」
（〇〇兄 は 今 海に 行っていっしょるよー。）

^{1 3)} この段階では、「対者敬語」と「第三者敬語」での表れ方の違いと考えていたためである。

2007 年 4 月 尊敬語「イモリ」の補助動詞用法の範囲

「行く」「来る」「出る」の意味の補助動詞用法を中心に質問項目を作成した。

結果、「行く」の常態は「イキュリ」であるが、「出る」の本動詞「イジュリ」が「行く」の「完了・結果」をも表すという 2 つの形態が併用されていることが分かった¹⁴⁾。よって、「イジモットー」は「イジュリ+イモリ」で構成され、「完了・結果」を後接している「イモリ」が表しているのではなく、前接の「イジュリ」の問題であることが分かった。よって、前接の動詞を「行く」「来る」以外にしたとき、「イモリ」が後接するのか、するとしたらどのような形態なのかという問題が生じた。

また、本来の「出る」の意味に後接する「イモリ」は「イジティモットー（出ていらっしゃるよ）」という「テ形」を介する形態が使用されていた。

2007 年 8 月 敬語動詞「イモリ」の本動詞用法と他の動詞との関わり

「居る」の意味で動詞に後接する「イモリ」が、「行く」「来る」以外の動詞に後接できるのか、できるとしたらどのような形態をとるのかを、工藤(2004b)の動詞分類に基づき補助動詞文を作成した。また、「イモリ」が共通語の「行く」「来る」「居る」の意味とどれだけ対応しているのかを確認するために『日本国語大辞典』における意味分類に基づいた質問文も作成した。その結果より、老年層と若年層の使用する「イモリ」の意味用法の違いを見ようとした。老年層の動詞に後接する「居る」の意味の「イモリ」が補助動詞なのか、複合動詞なのかについての問題も本動詞との関わりから推論しようと試みた。そのため、本動詞が一文の中で 2 つある場合と、「行く」「来る」「居る」を「行って来る」のように複合させた場合と、「行く」「来る」が動詞に後接した場合、「イモリ」がどの程度表れてくるかも確認した。

敬語意識の世代間の変化も把握したかったため、簡単なアンケート調査をインフォーマントに行なった。

龍郷町出身のインフォーマントに限って調査していたので、地域差があるのか確認のために隣の町である笠利町出身の中年層に対しても、「居る」の補助動詞用法の調査を数名に行なった。

この調査の結果が本論文の調査結果の基本となっているため、第 2 章で今までの調査結果とともに概要をまとめる。

2007 年 11 月 笠利町の老年層の「イモリ」の用法と調査結果の再確認

笠利町の老年層の「行く」「来る」に後接する「居る」の補助動詞用法を調べ、「現在の

¹⁴⁾ 『奄美方言分類辞典』の「イキュリ（行く）」の説明では、「イジュリ（出る）」について「?izi はいに(往)}が混在したもの。」とある。しかし、龍郷町で調査を行った結果、「イジュリ」は「行く」の「完了・結果」の部分に現れ、「イキュリ（行く）」と併用されていた。また、「明日遊びに行こう。」の質問文で「イジュコヤー」と「イコヤー」の 2 形態が現れた。意味的には同じであるが、「イジュコヤー」は「少し時間が立った後行く」、「イコヤー」は「すぐ行く」という時間的な差を動詞で区別しているようだ。今後も追っていきたい問題の一つである。

進行」の際、笠利町の中年層と同じように「イジモットー」を使用するかを確認した。

また、「来る」「行く」が後接した場合の例を増やし、老年層と中年層で「イモリ」がどのような形態の違いを見せるのか、また「結婚している」「顔が似ている」「手が空いている」のような状態を表す「～ている」表現のとき「イモリ」が使用することができるかを確認した。

1.3.6. 質問票と敬語意識アンケート

以下の質問票は、2007年8月に行なった調査に使用したものである。その次に、簡単な敬語アンケートを載せている。

実際調査をしてみるとインフォーマントの想定しにくい質問文や、生活の中でほとんど使用しない表現のため回答を得られなかったものもある。その場合は、動詞の複合の形と第三者だけは変えずに質問文をインフォーマントが答えやすいものに変えた。よって、得られた回答は、質問文と語の互換性のないものが多数ある。

また、中年層の中には、聞き手が年上でない場合は第三者が敬意の対象であっても「イモリ」を使用しないインフォーマントがいた。今回の調査では、敬語動詞「イモリ」の使用範囲を明らかにしたかったため、そのようなインフォーマントに対しては、聞き手を「年上」にして調査を行なった。「イモリ」が「動作主への敬意」から「聞き手への敬意」へと変化しつつあるためだろう。今後は場面設定の違いによる「イモリ」の使用も調べることで、より実態に近い資料が得られると思われる。

記号の説明であるが、○で囲まれた数字は、辞書的意味の分類番号順である。○で囲まれたカタカナの「イロハ」はその下位概念である。何の印のない数字は、質問文の数字である。

敬語動詞「イモリ」の本動詞の意味用法と補助動詞の意味用法の質問票

【本動詞】

行く

①今いる所から向こうのほうへ進み動く

④元の場所から離れるように進み動く。でかける。立ち去る。

1. 先生はここから学校に行く。

⑥目的の場所に向かって進む。おもむく。

2. 先生が明日学校に行く。¹⁵⁾

3. 先生が今日学校に行く。

¹⁵⁾ 質問している意味は同じであるが、時制の違いで「行く」の形態がどのように変化するかを調べるため、「明日」「今日」「昨日」を設定した。

4. 先生は昨日学校に行った。

㊦先方に到達する。遠くに届く。

5. 先生が大勝まで行く。

㊦一旦近くに進んで来て、向こうへ離れ去る

㊦通り過ぎる。

㊦ある場所を通る。

6. 先生が私の家の前を（通って）行く

㊦（年月が）過ぎ去る。また、ある年齢に達する。

7. 先生はだいぶ年の行った人だ。

㊦死ぬ、逝去する。

8. 先生が（逝）行く。

㊦（嫁・婿・養子などになって）他家へ移る

9. 先生がお嫁に行く。

㊦愉快になる。満足する。納得する。

10. 先生は満足が行くまで本を読んだ。

㊦（損・得・満足・納得など）ある結果が生じる。

11. 先生は納得が行ったようだ。

㊦物事を行う。また、生活を維持する。

12. 先生はこの予定で行くつもりだ。

㊦物事が行われる。事が運ぶ。

13. 先生の手術がうまく行く。

㊦物事を相当な程度やることができる。

14. 先生はお酒が行ける。

㊦㊦ある基準、目標などに達する。

15. 先生の体重が目標まで行く。

㊦道などが通じる。通っている。

16. この道は先生が学校に行く道だ。

来る

⑫こちらに向かって近づく

④空間的に近づく。

17. 先生は明日学校に来る。¹⁶⁾

18. 先生が今日学校に来る。

19. 先生が昨日学校に来た。

⑤時間的に近づく。

20. 先生の順番が来る。

⑬(目的地を主にした言い方で) そちらに行く。

21. 先生が母校に遊びに来る。

⑭心がある人に向く。慕う気持ちが起こる。

22. 先生がある人に来ている。

⑮古くなる。いたんでいる。

23. 先生が作った料理が来ている。

⑯空腹になる

24. 先生のお腹がだいぶ来ている。

⑰(「・・・と来ている」の形で) ある状態である。

25. 先生はお酒が好きな上に、パチンコ好きと来ている

⑱(「・・・来る」の形で) ある物を取りあげていう。

26. 先生が生徒の行動で頭に来ることを話した。

27. 先生と来たら最近怒ってばかりだ。

⑲こちらに向かって言いかける。

28. 先生に理屈でこられたらかなわない。

⑳(「・・・から来る」の形で) あることが原因となって現れる。

¹⁶⁾ 質問している意味は同じであるが、時制の違いで「来る」の形態がどのように変化するかを調べるため、「明日」「今日」「昨日」を設定した。

29. 先生が過労から来た病気にかかる。

㉑ある物や状態が、その人やその人に関係の深いものに自然に生じる。

30. 先生の体が限界に来た。

㉒自分の心や五感に感じる

31. 先生の心にジンと来る話を生徒がした。

先生の頭にピンと来る。

居る

㉓ある場所に存在する

32. 先生は明日学校に居る。¹⁷⁾

33. 先生は今日学校に居る。

34. 先生は昨日学校に居た。

㉔（鳥・虫など飛ぶものが）ある物にじっとつかまる

35. 先生の飼っている鳥が、木の上に居る。

㉕ある地位につく。

36. 先生は生徒を指導する立場に居る

㉖ある場所に居を定める。住む。

37. 先生は十年前から島に居る

㉗ある種類の人間が、抽象的な意味で存在する

38. 先生には苦手な人が居る

㉘ある人にとって、親族・上司・部下などの社会的関係のもとで、ある人が存在する。

39. 先生には子供が二人居る

本動詞、本動詞

㉙40. 先生は学校へ行って、その後私の家に来る

¹⁷⁾ 質問している意味は同じであるが、時制の違いで「居る」の形態がどのように変化するかを調べるため、「明日」「今日」「昨日」を設定した。

㊦ 4 1. 先生は朝から学校に行って、夜までそこに居る

㊦ 4 2. 先生は私の家に来て、それから学校へ行く

㊦ 4 3. 先生は朝から私の家に来て、夜までここに居る

㊦ 4 4. 先生は教室に居て、それから生徒の居る運動場へ行く

㊦ 4 5. 先生は教室に居て、それから校長先生の居る運動場に来る

本動詞・本動詞

㊦ 4 6. 先生が修学旅行に行つて来る。

先生が修学旅行に行つて居た。

先生は修学旅行に来て居る。

先生が菓子を買つて来る。

先生が教室から出て行く。

補助動詞

【主体変化動詞 位置変化】

《行く》

先生が学校に行っている（現在の完了・結果）

先生が学校に行っている（現在の進行）

私が明日家を出ることには、先生はもう学校に行っている。（未来の完了・結果）

私が明日家を出ることには、先生はもう学校に行っている。（未来の進行）

昨日私の会ったとき先生はどこに行っていたのか。（過去の完了・結果）

昨日私の会ったとき先生はどこに行っていたのか。（過去の進行）

《来る》

先生が学校に来ている。（現在の完了・結果）

先生が学校に来ている。（現在の進行）

私が家に帰るころには先生は私の家に来ているだろう。（未来の完了・結果）

私が家に帰るころには先生は私の家に来ているだろう。（未来の進行）

先生は昨日の朝早くから学校に来ていた。（過去の完了・進行）

先生は昨日の朝早くから学校に来ていた。（過去の進行）

先生の順番が来ている（進行）

先生は若い頃から苦勞をして来た。

先生が教室から出ている。(完了・結果)

先生が教室から出ている。(進行)

先生が教室に入っている。(完了・進行)

先生が教室に入っている。(進行)

【主体変化動詞 状態変化】

先生が椅子に座っている。(完了・結果)

先生が椅子に座っている。(進行)

先生が立っている。(完了・結果)

先生が立っている。(進行)

先生が死んでいる。(完了・進行)

先生が死んでいる。(進行)

【主体動作客体変化動詞 位置変化】

先生が水槽から水を出している。(完了・結果)

先生が水槽から水を出している。(進行)

先生が水槽に水を入れている。(完了・結果)

先生が水槽に水を入れている。(進行)

【主体動作客体変化動詞 状態変化】

先生が窓を開けている。(完了・結果)

先生が窓を開けている。(進行)

先生が紙をはさみで切っている。(完了・結果)

先生が紙をはさみで切っている。(進行)

【主体動作動詞 他動詞】

先生がご飯を食べている。(完了・結果)

先生がご飯を食べている。(進行)

先生が生徒を見ている。(完了・結果)

先生が生徒を見ている。(進行)

先生が本を読んでいる。(完了・結果)

先生が本を読んでいる。(進行)

【主体動作動詞 自動詞】

先生が走っている。(完了・結果)

先生が走っている。(進行)

先生が海で泳いでいる。(完了・結果)

先生が海で泳いでいる。(進行)

先生はあの頃毎日私の家に来ていた。

先生がどんどん部屋をかたづけて行く。

先生の顔色がよくなって行く。
先生の顔色がよくなって来る。
先生の顔色がよくなって居る。
先生がたくさんの御菓子を籠に入れて行く。
校長先生の腰が曲がって来る。

奄美方言における敬語意識アンケート

広島女学院大学 言語文化研究科 日本言語文化専攻 2年 重野裕美

私は現在、奄美方言の敬語体系について調査をしています。ここで得た情報は、研究以外には使用致しません。答えていただける範囲で結構ですので、アンケートへのご協力をよろしくお願い致します。

1. 氏名

2. 生年月日

3. 出身地¹⁸⁾

父：出身地

母：出身地

配偶者：出身地

4. 居住歴

(例)0－18 歳 龍郷町浦 19－20 歳 鹿児島県指宿市 21－現在 龍郷町浦

・
・
・

5. 現住所

6. 日常生活で、奄美方言の敬語動詞「イモリ」をどのような相手に使用していますか。あてはまるものに○印をしてください。また、方言の敬語動詞「イモリ」は使用しないが、

¹⁸⁾ 卒業論文より、生え抜きのインフォーマントだとしても、両親（特に母親）が違う場所の出身地である場合、両親が使用する言語の方に特徴が似てくることが分かった。よって、父・母・配偶者の出身地を設定している。

共通語の敬語を使用する相手には△印をしてください。なお、下記の人々は島出身の人の設定です¹⁹⁾。

祖父母 両親 兄弟 弟妹 親戚(年上・年下) 親しい親戚(年上・年下)

近所の人(年上・年下) 親しい近所の人(年上・年下) 職場の人(年上・年下)

親しい職場の人(年上・年下) 友達 先生 区長 議員

見知らぬ人(年上・年下) 使用しない

その他()

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

¹⁹⁾ 筆者の父(当時 57) に対し、対人認識調査アンケートを事前に行った。項目としては、「年齢(上・下)、性別(男・女)、ウチかソトか(親族・他人)、公私(公的・私的)、親疎(親・疎)、方言話者・共通語話者(島人・非島人)にそれぞれ分けた。それを実際の人物を想定してもらい、その相手に対して「会ったときのはじめのあいさつ」を答えてもらった。その調査結果を基に、さらに絞ったものが「奄美方言における敬語意識アンケート」である。

第 2 章 調査結果の概要

第2章 調査結果の概要

この章では、2006年8月から2007年11月の間に行った調査結果の概要を、本動詞用法と補助動詞用法に大きく分け、老年層と中年層の差を比較していく。

2.1. 本動詞用法

本動詞の意味用法を『日本国語大辞典』の意味分類に基づき、「イモリ」が「行く」「来る」「居る」とどのような対応を見せるか、老年層と中年層を比較しながら考察を進める。

2.1.1. 「行く」の意味用法

「行く」の本動詞における意味範囲を世代差の観点から比較する。意味を捉えた上で1人でも「イモリ」を使用していたら「○」を、「イモリ」を使用せず、別の形態しか表れなかった場合は「×」をしている。なお、下にいくにつれて意味が派生的になってくる。

	本動詞「行く」	老年層	中年層
①	今いる所から向こうの方へ進み動く	○	○
②	一旦近くに進んで来て、向こうへ離れ去る	○	×
③	(年月が) 過ぎ去る。ある年齢に達する	×	×
④	死ぬ。逝去する。	○	○
⑤	(嫁・婿・養子などになって) 他家へ移る	○	○
⑥	愉快になる。満足する。納得する。	×	×
⑦	(損・得・満足・納得など) ある結果が生じる ²⁰⁾ 。	×	×
⑧	物事を行う。また、生活を維持する。	○	×
⑨	物事が行われる。事が運ぶ。	×	×
⑩	物事を相当な程度やることができる。	×	×
⑪	ある基準、目標などに達する。	×	×

表1: 「行く」の意味用法の世代差

表1の結果、老年層の「○」は5つ、中年層の「○」は3つで、老年層の方が意味の範囲が広いことが分かる。また、下の方へいくにつれて派生的な意味になるので、中年層は基本的な意味を中心に表すようである。②は「行く」よりも「通る」を使用し、③では「年をとっている」と解釈しがちであった。④は「行く(逝く)」と解釈するものもあったが、多くは「イモリ+否定」なので「居る+否定」の「モランナタン」を使用していた。⑤で

²⁰⁾ ⑥と⑦の意味は「納得が行く」「満足が行く」で統一して質問した。結果「納得が行く」「満足が行く」は方言では言い表しにくいようで、ほとんどのインフォーマントは「思い通りに行く／なる」と解釈した。

も両世代が「イモリ」を使用しているが、基本的意味の「移動」と「他家へ移る」が連想しやすいためだろう。⑧は「この予定で行く」で質問したところ、老年層に使用例が見られた。これは予定を立てると、時間の幅ではあるが、始点から終点への移動として捉えることができるためだろう。

以上、「イモリ」が使用されている意味について分析したところ、やはり「移動」の意味が想定できるものには「イモリ」が使用でき、しにくいものには他の動詞で言い換える傾向がある。また、老年層の方が意味の範囲が広いことから、中年層は「イモリ」に人の「移動」に意味用法が収縮していると考えられる。

2.1.2. 「来る」の意味用法

引き続き、「来る」の本動詞における意味範囲を世代差の観点から比較する。記号の意味は「行く」のときと同じなので説明は省略する。

	本動詞「来る」	老年層	中年層
①	こちらに向かって近づく。	○	○
②	(目的地を主にした言い方で) そちらに行く。	○	○
③	心がある人に向く。慕う気持ちが起こる。	×	×
④	古くなる。いたんでいる。	×	×
⑤	空腹になる。	×	×
⑥	(「…と来ている」の形で) ある状態である。	×	×
⑦	(「…来る」の形で) ある物を取りあげていう。	×	×
⑧	こちらに向かって言いかける。	×	×
⑨	(「…から来る」の形で) あることが原因となって現れる。	×	×
⑩	ある物や状態が、その人やその人に関係の深いものに自然に生じる。	×	×
⑪	自分の心や五感に感じる。	×	×

表2: 「来る」の意味用法の世代差

「来る」では①と②の基本的意味の「移動」にしか「イモリ」は表れなかった。また、②は九州方言の「対者待遇発想²¹⁾」の「そちらに行く」という意味での「来る」にも両世代「イモリ」が表れた。「×」の表現では、常態の「キュリ」「キュン」が使用されるか、他の語と置き換えて解釈されていた。

²¹⁾ 町 (2000) 「琉球方言の対者待遇発想の表現」 参照。

2.1.3. 「居る」の意味用法

引き続き、「居る」の本動詞における意味範囲を世代差の観点から比較する。記号の意味は「行く」のときと同じなので説明は省略する。

	本動詞「居る」	老年層	中年層
①	ある場所に存在する。	○	○
②	(鳥・虫など飛ぶのものが) ある物にじっとつかまる。	×	×
③	ある地位につく。	○	×
④	ある場所に居を定める。住む。	○	○
⑤	ある種類の人間が、抽象的な意味で存在する。	○	×
⑥	ある人にとって、親族・上司・部下などの社会的関係のもとで、ある人が存在する。	○	×

表3: 「居る」の意味用法の世代差

老年層においては、行為の主体が人でない場合以外は全てに「イモリ」を使用している。また、実際その場に人が「存在」するだけではなく、派生的な意味の「存在」でも「イモリ」が使用される。一方、中年層においては、基本的な意味の実際その場に人が存在している場合以外、敬意の対象に対する「居る」でも「イモリ」は使用されない。特に⑤と⑥は、「居る」を敬意の対象である人の支配下にあるので老年層は「イモリ」を使用するのだろう。それが中年層になると敬意対象者の場所的な「存在」以外「イモリ」を表わさないことが推測されるので、⑤と⑥は「支配される人が居る」と解釈し、敬意表現の「イモリ」は使用されないと考えられる。

以上、本動詞における意味範囲を考察してきたが、「行く」「来る」「居る」の中では「居る」が最も意味範囲が広く、次に「行く」「来る」の順番になることが分かった。また、この簡単な比較からも老年層より中年層の「イモリ」はその意味を縮小していることが読み取れる。このことより「イモリ」の意義素を考えると「居る」の意味が抽象的な人の「存在」も表すことができること、「行く」「来る」では最も基本的な意味の「移動」として「イモリ」を使用していること、「完了・結果」「進行」で形態差が80代を見るかぎりもともとなかったと思われることから、意義特徴は「人がある状態で存在している」と考え、意義素は「存在」であると仮定し、今後論を進めていく²¹⁾。

²¹⁾ この意義素を抽出することで、「行く」「来る」「居る」が動詞の後項に接合する際、補助動詞か複合動詞か区別するときの判断基準となる。

2.2. 補助動詞用法

ここでは、補助動詞用法として、本論文で重要な「補助動詞の定義」と「複合動詞の定義」を明確にし、今後の複合した「イモリ」を考察する基準としたい。

その後、次項から、老年層と中年層の動詞が複合している形態について述べる。

2.2.1. 補助動詞と複合動詞の定義

複合動詞の定義を、石井正彦(1987)「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化—」では次のように「合成動詞」「複合動詞」「補助結合動詞」「複合動詞後項」「補助動詞的要素」の用語を規定している。

合成動詞…動詞と動詞とが結びついて一語の動詞となったもの。一般的に「複合動詞」といわれているものをここでは「合成動詞」と呼ぶことにする。

複合動詞…合成動詞のうち、その後項が原義を保持している結びつき。後述する“【実現形態】→【結果内容】”の語構造を有するもの。

補助結合動詞…合成動詞のうち、動作の起こり方を示す補助動詞的要素を後項のもつ結びつき。

複合動詞後項…複合動詞の後項要素。補助動詞的要素と区別する。

補助動詞的要素…補助結合動詞の後項要素。合成動詞において、その意味が原義に比べて抽象化・形式化し、前項要素に付属的な意味（ここでは前項要素の動作の起こり方）を付け加える後項要素。複合動詞後項と区別する。

石井の考えを利用し、本論文での定義付けを行うとすれば、動詞が複合している場合、後項の語彙が原義を失っていなければ「複合動詞」

原義に比べて意味が抽象化・形式化していれば「補助動詞」

として扱う。その際「テ形^{2 2)}」が挿入されていても、動詞の後項が原義を残しているか、抽象化させているかで判断する。ここで言う「原義」とは、「イモリ」の本動詞の意味用法から抽出した意義素である「存在」のことを指す。それが抽象化・形式化した意味に捉えられるなら補助動詞用法とする。

^{2 2)} 「テ形」が挿入するかしないかも、複合動詞と補助動詞を分ける判断材料になるが、当該方言では「動詞+動詞」の形態で共通語の「～ている」表現を意味する動詞の複合が多数観察される。本論文では、動詞の意味による判断を行うが、「テ形」も重要な今後の課題である。また、有本光彦(2007)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』が九州方言の「テ形」について追っている。

2.2.2. 動詞の後項の世代差

「行く」「来る」「居る」が動詞の後項にそれぞれ接合した場合、「出て行く」「泳いで行く」「走って行く」「入れて行く」、「行って来る」「買って来る」「泳いで来る」「走って来る」「曲がって来る」、「行って居る」「来て居る」では、どのように「イモリ」が表れたのか、大まかにまとめる。

	老年層	中年層
出て行く	イジティ <u>モ</u> ッカー	イジティ <u>モ</u> ットー
泳いで行く	オジ <u>モン</u> ッチドー	オージ <u>イモリ</u> ショットー オージイキュットー
走って行く	ハシッチ <u>モ</u> ットー ハシッチシ <u>モ</u> ットー	ハシッチ <u>イモリ</u> ンショットー ハシッチイキョットー
入れて行く	イレティ <u>モ</u> リー	イレトウ <u>モ</u> ットー イレトウウリョットー

表4:「行く」が後項の場合

表4より、老年層では「行く」が後項の場合、どの動詞についても「イモリ」は表れる。「泳いで行く」以外は、「テ形」を介する形態である。一方、中年層では「入れて行く」を「入れている」と解釈している以外は、「イモリ」が使用されている。しかし、「イモリ」とともに、「イキョットー」という「行為主体への形態^{2 3)}」を表す敬意表現が使用されている。次に「来る」が後項する場合の「イモリ」を見ていく。

	老年層	中年層
行って来る	<u>モ</u> シヤン <u>モシ</u> モットー	<u>モ</u> シヤットー イジキョットー イジキュン イジュタン
買って来る	コーティ <u>モ</u> シー コーティキョタトー コーティキュットー	コーティ <u>モ</u> ットー コインショタンチドー コーティシチュリョットー

^{2 3)} 奄美方言には常態の「イキュットー（行く）」「キュットー（来る）」「ウットー（居る）」に対応し、それぞれの敬意表現である「イキョットー」「キョットー」「ウリョットー」がある。これらは、敬意対象の行為に使用するが、自分の行為に対しても使用できる。

例)「目上の人に「お前は明日行くか」と聞かれて「はい、いきます。」と答える場合」

オー、イキョットー。(はい、行かれますよ。)

意識としては、聞き手への敬意であるが、自分の行為を高めることになる。「美化語」「丁寧語」にも似ているが、それらは自分の行為は高めない。よって、奄美方言の敬語独自の表現として、本論では一旦「行為主体への敬態表現」という用語を設定する。しかしこの表現については今後詳しい調査が必要である。

泳いで来る	オジ <u>モ</u> ットー	オヨイデ <u>イモリ</u> ンショル オー <u>ジモシ</u> モル オー <u>ジキョ</u> ットー
走って来る	ハシッ <u>チモ</u> ットー	ハシッ <u>チモ</u> ットー ハシッ <u>チキョ</u> ットー
曲がって来る	マ <u>ガッテモ</u> ットー マ <u>ガッテ</u> キュン	マ <u>ガッテキョ</u> タットー

表 5: 「来る」が後項の場合

次に、「来る」が後項の場合の「イモリ」では、老年層と中年層共に、「イモリ」は一通り使用できるようである。しかし、中年層では、「イモリ」と共に「キョタットー」という「行為主体への形態」を表す敬意表現が使用されている。また、文型も中年層の方がバリエーションが豊富である。「曲がって来る」には、中年層は「イモリ」は言えなくなっている。

次は「居る」が後項の「イモリ」であるが、「～ている」表現は大まかに「完了・結果」「進行」の 2 つのアスペクトに分けることができる²⁴⁾。よってここでは、「行って居る」と「来て居る」の中でも地域差が見られた「行って居る」を取り出し、考察する。

	老年層	中年層
完了・結果	<u>モロ</u> ー <u>モシ</u> ュットー <u>モシモ</u> ットー	イ <u>ジモ</u> ットー イ <u>ジモシ</u> ュットー イ <u>キョ</u> ットー
進行	<u>モロ</u> ー <u>モシモ</u> ットー <u>モリ</u> カタ <u>モーシ</u> ュントロー <u>モヨ</u> カタシー <u>モリ</u> ヤー	<u>モリ</u> カタ <u>モーリ</u> ュントロ イ <u>ジロー</u> ッチシー <u>モリ</u> カタ イ <u>キュ</u> ンドロー イ <u>キ</u> カタ

表 6: 「居る」が後項の場合 (アスペクトの世代差)

老年層、中年層ともに「完了・結果」「進行」とともに「イモリ」を使用する。老年層では

²⁴⁾ アスペクトやテンスについては、諸研究者によって多くの論があり、用語も様々である。本論では、学校英語で使用する程度の意味で「現在」「未来」「過去」や「完了・結果」「進行」の用語を扱う。

「完了・結果」「進行」に「イモリ」一語の敬態と「行つて居る」のそれぞれに「イモリ」を使用した「モシモットー」という形態が見られる。具体的には80代は形態面では「完了・結果」「進行」を表しわけないようである。60代になってくると、「～トロ（～ところ）」「～カタ（～途中）」を付加させて「進行」の意味を補う形態が見られる。

一方、中年層では、「完了・結果」「進行」を表し分けるために、「進行」には「～トロー」「～カタ」が形態として定着するようになる。

次に、表7-1と表7-2より龍郷町方面の中年層²⁵⁾と(旧)笠利町方面の中年層の「イジモットー」という形態が龍郷町方面の中年層では「完了・結果」を、笠利町方面の中年層にとっては「現在の進行」を表す地域差があることが分かった。

したがって、龍郷町方面の中年層の「イジモットー」は「完了・結果」の意味であれば「現在」「未来」「過去」のテンスに左右されることはない。一方、笠利町方面の中年層の「イジモットー」は「現在の進行」を表すため、「未来」「過去」の意味では使用しない。「完了・結果」には「ウットー(「居る」の常態)」「イキョットー(「行く」の「行為主体への敬態表現」)」「モシュットー(「居る」のイモリ)」などを使用する。

	老年層	中年層
完了・結果	モシュットー モシモットー	モシュットー イジモットー イキョットー
進行	モシュリカタ モシュントロ シーモットー モシモットー	モシュリカタ モシュントロ シーモットー イジュリカタシモン

表7-1:「行つて居る」(龍郷町)

時制：現在	老年層	中年層
完了・結果	モシュットー	ウットー(「居る」) イキョットー モシュットー(「居る」)
進行	モシュリー モシュンバニシ	イジモットー

表7-2:「行つて居る」((旧)笠利町)

²⁵⁾「龍郷町方面の中年層」とは、龍郷町内の中年層の調査で、「イジモットー」を(旧)笠利町の用法と同じ用法を鹿渡集落と安木屋場集落出身の中年層が使用したためである。「～町」と町名でわけるのはなく、「～町方面」とすることでこの中年層は「(旧)笠利町方面の中年層」の用法として分類する。

なお、「イジモットー」は分かりやすいように網掛けをしている。

老年層では、地域差は見られず、中年層に起こった地域差であることが分かる。また、ほとんど方言を話せない世代の 30 代女性の（旧）笠利町出身者に、「センセーヤ ガッコー ムッチ イジモットーと聞いたとき、先生は今どのような状態ですか。」と質問したところ、「学校に向かっているところ」という回答が得られた。（旧）笠利町方面では、方言は話せないが聞いて分かる世代にもこの意味用法が受け継がれていることが分かった。

以上、動詞の後項に「行く」「来る」「居る」がそれぞれ接合した場合、「イモリ」がそのように表れるかを世代差の観点から考察した。老年層、中年層ともに前項の動詞に関係なく「行く」「来る」「居る」が後項だとある程度「イモリ」で表すことができた。ところが、中年層では「イモリ」だけではなく、「イキョットー（行かれる）」「キョットー（来られる）」のような「行為主体への敬態表現」の形態が併用されている。今後、この形態が主流になるものと予測される。

また、「行って居る」では、中年層において地域差が表れた。これは「行って居る」のみに表れる地域差で、「来て居る」では意味用法に違いは見られなかった。なぜ、「行って居る」にこのような違いがあるか現段階では判然としない。しかしながら、調査中、（旧）笠利町方面の中年層に「イジモットーはどのようなときに使いますか。」と質問した際、ほとんどのインフォーマントから「「〇〇さん（目上）はどこに行ったの。」と聞かれたときに、答える言葉」「今出て行っている」という意味」という教示を得た。このことから推測するに、この地域の中年層は「イジュリ」のもともとの意味の「出る」に「居る」の意味の「イモリ」を後接した「イジモットー（出ていらっしゃるよー）」として「行って居る」を表しているのではないかと考えられる。普通、老年層も含めて「出て行く」の質問には「イジティモットー」のように「テ形」を介すことで「行っている」の「完了・結果」と表わし分けている。これは「居る」の意味での「イモリ」だけの問題ではなく、「行く」の意味の問題だと思われる。「イキュリ（行く）」と「イジュリ（出る）」を併用していたのが、意味範囲にズレが生じているとも予測できるが、現段階では確かめることはできない。指摘のみに留める²⁶⁾。

²⁶⁾ 今までの調査から、中年層において「行って居る」に限って地域差があることが分かった。しかし、今回は龍郷町出身者の老年層と中年層を比較を詳しく行うことを目的とするため、（旧）笠利町出身者から得られた調査結果は除外して今後論を展開していく。

第 3 章 「イモリ」の本動詞の意味用法

第3章 「イモリ」の本動詞の意味用法

本章では、「イモリ」に関わる「行く」「来る」「居る」の本動詞の意味を『日本国語大辞典』の意味分類に対応させながら、考察を進める。

なお、実際の調査では、質問文をそのまま翻訳してもらうよりも、インフォーマントに意味を理解した上で回答をしてもらうことを重視した。よって、用意していた質問文とのズレが回答には多数あるが、共通語との単語レベルの置き換えではなく生活実態に近い文型や言い回しも取り出すことに繋がるので、支障のないものとして扱う。

また、この本動詞は補助動詞の調査を優先的に行った。よって本動詞の意味用法はインフォーマントへの質問時間に余裕があるときに行なったもので、補助動詞用法ほど調査することはできなかった。よって、比較的長時間調査が可能であった of(80)、om(68)、om(65)、of(64)、mm(57)の5名のインフォーマントの調査結果を基本としている。その中で of(80)と mm(57)の2名は母と息子の関係であり、「イモリ」が親から子どもへどのように受け継がれていくかも観察できる資料になると思われる。

3.1. 「行く」の意味用法

「行く」の意味について、「イモリ」の意味範囲を世代順に追って考察することにする。回答は、同じ世代のものでも語の構成や言い回しが違う場合は全て載せる。また、形態の上での男女差は見られないため、年齢の高い順に回答を示す。文例は、カタカナ表記の下に筆者の内省による、共通語訳を付ける。また文例が複数ある場合は、インフォーマントが答えた順に並べている。記号として、om は老年層の男性、of は老年層の女性、mm は中年層の男性、mf は中年層の女性を表す。敬語動詞「イモリ」には分かりやすいように傍線を引く。また、「戸口」とあるのは、戸口集落出身の80代の女性4名を指す。調査の際、同時に4名に対して調査を行なった。生年月日と氏名を確認することが出来ず、4名とも80代であることしか分からなかった。また、ほとんど表現に差は見られなかったためひとまとめにして「of 戸口 (80)」として扱う。

《行く》

①今いる所から向こうのほうへ進み動く。

④元の場所から離れるように進み動く。でかける。立ち去る。

1. 先生はここから学校に行く。

om(68) : コーチョーセンセーガ ガッコーッチ モットー。

(校長先生が 学校に いらっしゃる一。)

mm(54) : クッカラ ガッコージ イキュン。

(こっから 学校に 行く。)

mm(52) : センセーガ ガッコーッチ イキョタットー/モタットー。

(先生が 学校に 行かれたよー／いらっしゃったよー。)

mf(40) : センセーガ モシャットー。

(先生が いらっしゃった。)

mm(54)が常態の「イキュリ (行く)」を使用している以外、他のインフォーマントでは「イモリ」が使用されている。その形態は、「モットー (敬語動詞＋終助詞)」、「モタットー (敬語動詞＋過去の助詞＋終助詞)」、「モシャットー (敬語動詞＋敬語助動詞＋終助詞)」の三態である。

なお、mm(52)の「イキョタットー」は常態の「イキュリ」と似ているが、用法としては敬意表現であり、動作主の行為を高めて使用する表現でもあるが、聞き手が年上で、その人に自分の行為について説明する際も使用する。自分の行為を高めることが聞き手への敬いの気持ちを表すのである。これは、丁寧語と似ているように思えるが、丁寧語には「ダリヨリ (～です)」という表現が存在する。また、「美化語」や「丁重語」とも採れるが、ここでは、「行為主体への敬態」として扱い、直訳ではないが「～られる」の受身の形で共通語訳をあてる。

㊤ 目的の場所に向かって進む。おもむく。

2. 先生が明日学校に行く

of(80) : センセーヌ アッシャヤ ガッコーツチ モンツチ イシモタットー。

(先生は 明日は 学校に いらっしゃるって 言っていらっしゃったよー。)

mm(57) : センセーヤ アッシャ イキョットー。

(先生は 明日 行かれたよー。)

mm(54) : アッシャ ウミツチ モンダロー。

(明日 海を いらっしゃるだろー。)

ここでは、「行く」の意味が「明日」「今日」「昨日」という時間軸の中で「イモリ」がどのような形態の違いを見せるかを考察する。

まず、「明日」での文例では of(80)は「学校に行く」の「行く」の部分に「イモリ」を使用し、さらに「言っていたよ」の「～ている」にも「居る」の意味での補助動詞用法を使用している。mm(54)は「ダロー」という推量の表現を「イモリ」に付けている。mm(57)は、「イキョットー」という「行為主体への敬態」を「イモリ」の代わりに使用している。

3. 先生が今日学校に行く

of(80) : センセーヤ キューヤ ガッコーツチ モン。

(先生は 今日は 学校に いらっしゃる。)

mm(57) : センセーヤ キュー ガッコーツチ イキョットー。

(先生は 今日 学校に 行かれる。)

ここでも、**mm(57)**は「イモリ」ではなく、「行為主体への敬態」を使用している。

時制が「今日」でも「明日」のときと比較して「キュー (今日)」と「アッシャ (明日)」が入れ替わるだけで、他の形態は変わりがないようである。

4. 先生は昨日学校に行った

of(80) : センセーヤ キヌヤ ガッコーッチ モッシャンチドー。

(先生は 昨日は 学校に いらっしゃるってよー。)

mm(57) : センセーヤ キヌー ガッコーッチ イジキョタン／イキョタン／イジャン。

(先生は 昨日 学校に 行かれた／行って来られた／行かれた／行った。)

mm(35) : センセーガ イジャンチドー。

(先生が 行ったってよー。)

ここでは、老年層は「イモリ」を変わず使用するのに対して、中年層は「行く」の常態か「行為主体への敬態」を使用している。しかしながら、「行く」の常態ではあるが、これは「出る」が本来の意味の「イジュリ」である。この「イジュリ」は龍郷町では「行く」の「完了・結果」の意味のときに使用される。この項目は、「昨日」という過去のことを表す文例なので、「イジュリ」が「行く」として使用されているのである²⁷⁾。

mm(57)の「イジキョタン」を分析すると「イジュリ+行為主体への敬態表現 (来る) + 過去の助詞」で共通語訳は「行って来られた」となる。

㊦先方に到達する。遠くに届く。

5. 先生が大勝まで行く。

om(65) : ナンヤ オーガチガル モンニャー。

(あなたは 大勝まで いらっしゃるねー。)

mm(54) : センセーガ オーガチガリ イキュン。

(先生が 大勝まで 行く。)

老年層では「イモル」が使用されているが、中年層では常態の「イキュリ」が使用されている。

㊦一旦近くに進んで来て、向こうへ離れ去る

㊦通り過ぎる。

²⁷⁾ 注 23 参照。

㊤ある場所を通る。

6. 先生が私の家の前を（通って）行く

of(80)：センセーヤ ワキヤヤヌ ムエラガ トーリショタットー。

（先生は 私の家の 前を 通られたよー。）

om(68)：コーチャーセンセーガ ワンノ ムエッチ モットー。

（校長先生が 私の 前を いらっしゃるー。）

mm(57)：センセーヤ ワキヤヤーヌ マエバ トーリユントロー／イキショントロー。

（先生は 私の家の 前を 通られるところー／行かれるところー。）

mm(54)：モエラガ イキュン。

（前を 行く。）

ここでは、om(68)のみ「イモリ」を使用し、of(80)と mm(57)では「通る＋敬語助動詞（＋トロー）」が使用されている。mm(54)では、常態の「イキュリ」である。

話し手の前を移動する人の行為を伝える場合、「行く」よりも「通る」の方が言いやすい傾向があるようだ。

先生が車でそこに行く。

of(80)：クルマシ ナマ モットー。

（車で 今 いらっしゃるよー。）

mm(57)：センセーヤ クルマシ ムウエラガ イキョットー。

（先生は 車で 前を 行かれるよー。）

この質問は、上の質問とほぼ同じである。目的としては、第三者が乗り物で移動する場合、その行為に対して「イモリ」が使用できるかを確認するためである。

結果、老年層で「イモリ」が使用され、中年層でも「イキョットー」という「行為主体への敬態」が今までの質問と変わらず使用されているので、乗り物で移動する場合も、行為の主体が敬うような相手の場合は「イモリ」が使用されるようである。

③（年月が）過ぎ去る。また、ある年齢に達する。

7. 先生はだいぶ年の行った人だ。

of 戸口(80)：センセーガ トシトゥティモリヤー。

（先生は 年にとっていらっしゃるねー。）

om(65)：ナンヤ トウシカタ アリンションカナヤー。

（あなたは 年かた あられるからねー。）

人が主語で「年が行く」を老年層は、「年をとって居る」のように解釈するインフォーマ

ントがほとんどであった。よって、「行く」の「イモリ」よりも「居る」の「イモリ」であるので、派生的な意味には「イモリ」は使用できないと考えられる。

また、om(65)は「トゥシカタ アリション」という表現を使用した。意識すれば「年寄りであられるからねー」であろうか。

④死ぬ、逝去する。

8. 先生が（逝）行く

of(80) : センセーヌ モランナタン。

(先生は いらっしゃらなくなった。)

om(65) : テンゴクッチ モシナー。

(天国に いらっしゃられたねー。)

ウッタチンショタネー。

(発たられたねー。)

mm(57) : センセーガモーリショタン

(先生が いらっしゃられた。)

mm(54) : モーランナタン。

(いらっしゃらなくなった。)

「あの世へ行く（逝く）」「この世から居なくなった」と解釈し、「行く（逝く）」「居る」の箇所「イモリ」を全てのインフォーマントが使用している。今まで、「イキョットー」を使用していた mm(57)も、「死ぬ」の意味の際には「イモリ」を使用していた。これは、直接「シジュリ（死ぬ）」と使用するのを避け、亡くなった人に対して敬意を払っているためであろう。「イモリ」に「否定」の「ラン（ない）」が接している表現は「居る」の「イモリ」で、「ラン（ない）」が接していない表現は「行く」の「イモリ」である。

⑤（嫁・婿・養子などになって）他家へ移る

9. 先生がお嫁に行く

of(86) : センセーガ ケッコンシ ヤータチイキュン。

(先生が 結婚して 家を発って行く。)

of(80) : センセーヤ ヤータチショタンッチドー。

(先生は 家を発たられたってよー。)

of 戸口(80) : センセーヌ ヨーシッチ モシヤン。

(先生は 養子に いらっしゃる。)

mm(57) : センセーヌ ヨメニ イキション、ヨーシッチ モシヤン。

(先生は 嫁に 行かれた、養子に いらっしゃる。)

mm(54) : ヤータチ イキュンツチュッカナー。

(家を発って 行くそうよー。)

「お嫁に行く」は「ヤータチイキュン (家を発つ)」という語があるようである。よって、「行く」の部分には「イモリ」はでてこない。したがって、「養子に行く」で質問したところ、「イモリ」が「行く」の部分に表れたが、「他家に移る」というよりも「移動」という原義の意味が強いのかかもしれない。それか、「養子になる」と言い換えようとするインフォーマントが多かったので、質問文に合わせて「行く」の部分を「イモリ」に置き換えた可能性もある。

⑥愉快になる。満足する。納得する。

10. 先生は満足が行くまで本を読んだ

⑦ (損・得・満足・納得など) ある結果が生じる。

11. 先生は納得が行ったようだ。

of(80) : ジブンガ ヨモーッチ オモユンドロガル ヨマンバ ガッテンナランツチ。

(自分が 読もうと 思うところまで 読まないと 合点ならんって。)

of 戸口(80) : キヌスミンガリ ホンオ ユディ。

(気のすむまで 本を 読んでる。)

of(68) : センセーガ オモイナリー ホンオ ヨミンショタリー。

(先生が 思い通り 本を 読んでられたー。)

オモイナリ イキュン。

(思い通り 行く。)

mm(57) : センセーガ ナットク イキションドロガル ホンオ ユミショタットー。

(先生が 納得 行かれるところまで 本を 読まれたよー。)

キヌスミュンガル ホンオ ユディ。

(気のすむまで 本を 読んだ。)

「愉快になる。満足する。納得する。」それぞれで当てはめて質問したところ、ほとんどのインフォーマントが「方言では何ち言うかい。」と言い、戸惑っていた。考えた末、「納得が行く」「気の済むまで」という表現に納まるようである。「合点が行く」という表現も見られた。「イモリ」も使用されないようである。

⑧物事を行う。また、生活を維持する。

12. 先生はこの予定で行くつもりだ。

of(80) : クンツモリデ イキュンツチュッカナー。

(このつもりで 行くってよー。)

of 戸口(80) : クンヨテーバリ シュンツモリジャ。

(この予定で するつもりじゃ。)

om(68) : クルシ イコヤー。

(これで 行こうねー。)

om(65) : ナンヤ クンヨテーシモン ダリョーヤー。

(あなたは この予定でしていращやる だろうねー。)

of(64) : コノヨテーデ モンツモリ ジャヤー。

(この予定で いращやるつもり だねー。)

mm(54) : クンツモリデ イキュン チュッカナー／イキュンツモリドー。

(このつもりで 行く らしいよー／行くつもりよー。)

老年層では「この予定でするつもり」という意味の「クンヨテーバリシュンツモリ」という表現が言いやすいようである。そこをあえて、「この予定で行く」で表現してもらおうと of(64)が「行く」の意味で「イモリ」を使用した。この表現も「する」の方で表し、「行く」では言いにくいようである。

⑨物事が行われる。事が運ぶ。

13. 先生の手術がうまく行く

of(80) : シュジュツダカ ジョーズニ イジャン。

(手術だか 上手に 行った。)

mm(57) : センセーヌ シュジュツガ イーダッカイキョタットー。

(先生は 手術が いいように行かれたよー。)

ジョーズニスラッタン／イッチャン／イジャン。

(上手にした／行った／行った。)

mm(54) : シュジュツガ イーダッカ イジャンツチュッカナー。

(手術が いい様に 行ったらしいよー。)

この表現は、「完了・結果」であるので「イジュリ (出る)」が「行く」の意味で使用されている。また、「イモリ」は老年層においても使用されないようである。やはり、「移動」の意味からの派生的意味には、行為の主体が敬意の対象であっても「イモリ」は言いにくいようだ。

⑩物事を相当な程度やることができる。

14. 先生はお酒が行ける。

om(68) : センセーヤ アンマリ セーヤ イッパイ ノミュットー。

(先生は あんまり 酒は いっぱい 飲むよー。)

om(65) : セーックワ スキダリユンニャー。

(酒を 好きですねー。)

「物事をある程度やることができる」では、「行く」という意味の「イキュリ」すら使用されず、「好きである」というように解釈される。

⑪⑦ある基準、目標などに達する。

15. 先生の体重が目標まで行く。

om(68) : タイジュー ヒナラシュンタムニ モクヒョーガル イキュンドー。

(体重 減らせるために 目標まで 行くよー。)

of(64) : モクヒョーガリ モシヤン ミタイヤー。

(目標まで いらっしゃられる みたいねー。)

mm(54) : モクヒョー イエローッチ シチュットー。

ほとんど「目標まで行く」よりも、「体重が減った」という表現に変えようとする傾向があり、答えにくいようであった。

of(64)が「イモリ」を使用しているが、ほとんどのインフォーマントが言い換えられなかった「この予定で行く」でも「イモリ」をたった一人使用していた。よって、質問文に合わせて、「行く」の部分を「イモリ」で置き換えて回答しているか、共通語の言語感覚に近いが、方言を自由に操れるため、「目標まで行く」が「イモリ」で言い表された可能性がある。方言の言語感覚が強い話者にとっては言い表しにくい表現であるようだ²⁸⁾。

⑫道などが通じる。通っている。

16. この道は先生が学校に行く道だ。

om(68) : クンミチャ センセーガ ガッコーッチ イキュンミチドー。

(この道は 先生が 学校に 行く道よー。)

of(64) : クンミチャ コーチョーセンセーヤ トーリションミチドー。

(この道は 校長先生は 通られる道よー。)

敬意の対象行為を表す語に「行く」が使用されていても、「道」が主語に来ている場合は「イモリ」は使用しないようである。変わりに、「トーリションミチドー」のように「通る＋「する」の行為主体への敬態＋道＋終助詞」の形態で敬意を表すようである。

²⁸⁾ これらのように、質問文の語彙の置き換えすら難しく、結局無回答となったインフォーマントが老年層に多かった。よって奄美方言独自の言い回しや、文法などがベースにあるためだと思われる。このようなことから質問紙法の限界や質問文作成時の問題を感じた。今後談話資料や、自然傍受法による調査を増やし補充・補完したい。

3.2.「来る」の意味用法

《来る》

⑫こちらに向かって近づく

④空間的に近づく。

17. 先生は明日学校に来る

of(80) : アッシャヤ ガッコーツチ モンツチ イシュタットー。

(明日は 学校に いらっしゃるって 言われたよー。)

mm(57) : センセーヤ アッシャ ガッコーツチ イモリシュットー。

(先生は 明日 学校に いらっしゃられるよー。)

基本の意味である「移動」には、中年層も「イモリ」を使用するようである。また、mm(57)は「敬語動詞＋敬語助動詞＋終助詞」という形態を使用し、老年層より付加する語が多い。

18. 先生が今日学校に来る

of(80) : センセーノ キューヤ ガッコーツチ モシャットー。

(先生は 今日は 学校に いらっしゃられるよー。)

mm(57) : センセーヤ キュー ガッコーツチ イモリシヨン。

(先生は 今日 学校に いらっしゃられる。)

mm(54) : カン モン。

(こっちに いらっしゃる。)

この質問に対しても、中年層は「イモリ」を使用し、また「イモリ」に敬語助動詞を付加した形態を使用している。

19. 先生が昨日学校に来た

of(80) : キヌー センセーヌ ガッコーツチ モシャットー。

(昨日は 先生が 学校に いらっしゃられるー。)

mm(57) : センセーヤ キヌー ガッコーツチ キョタットー。

(先生は 昨日 学校に 来られたよー。)

mm(57)は、「明日」「今日」の設定の文では「イモリ」を使用していたが、「昨日」では「行為主体への敬態」である「キョタットー (来られたよー)」を使用している。「イモリ」でも言える可能性があるが、過去の助詞「タ」を「イモリ」と組み合わせるよりも、「キョットー (来られるよー)」に「タ」を入れた「キョタットー」にする方が組み合わせやすかったのかもしれない。

「行く」の「移動」の意味を表わす質問文の回答をと比較してみると、「行く」では「イ

キョットー」を「明日」「今日」「昨日」で使用していて、「来る」では「明日」「今日」では「イモリ+敬語助動詞」の形態を、「昨日」では「キョタットー」を使用している。このことから、本動詞の「行く」「来る」では「行く」よりも中年層は「来る」の方が「イモリ」との結びつきが強い可能性がある。

㊤時間的に近づく。

20. 先生の順番が来る。

of 戸口(80) : ジュンバンガ シッチ。

(順番が来た。)

om(68) : ジュンバンノ キョットー。

(順番が 来られたよー。)

om(65) : ナンノ バンヌ キョタットー。

(あなたの 番が 来られたよー。)

「時間的に近づく」という意味の「来る」には「イモリ」は使用されないようである。

老年層の中でも 80 代は「来る」の常態である「シチュリ」を、60 代では「行為主体への敬態表現」である「キョットー」を使用している。

㊤ (目的地を主にした言い方で) そちらに行く。

21. 先生が母校に遊びに来る

of(80) : アソビガ モンチュッカナー。

(遊びが いらっしゃるってよー。)

om(68) : センセーガ ボコーッチ アソビガ キュットー。

(先生が 母校に 遊びが 来るよー。)

mm(54) : アソビガ モンチュッカナー。

(遊びが いらっしゃるってよー。)

om(68)は「来る」の常態である「キュットー」を、of(80)と om(68)は「イモリ」を使用している。om(68)は、「年上にはイモリを使用しないといけない。」と調査途中で筆者に度々話していたが、聞き手が「年上」の場合に「イモリ」を使用するインフォーマントでもあるため、このとき常態の「キュットー」が表れたのだろう²⁹⁾。

²⁹⁾ このようなことから、敬語意識と実際の使用とでズレが生じ、「イモリ」が衰退していくのだろう。中年層では、「最近の若い人は年上でも敬語を使用しないからだめだ。」という意見を多数得た。ところが、そのインフォーマントが老年層と同じレベルの敬語を使用しているかというところではない。言葉としてどこに敬意を表しているのか尋ねたところ、「語尾をやわらかくするのが丁寧だ。」という回答であった。敬語が衰退していく中で、敬意の気持ちを補うためにイントネーションの柔らかさが敬意につながる傾向がある。

⑭心がある人に向く。慕う気持ちが起こる。

22. 先生がある人に来る。

om(65) : センセー アンチュバ スキダリョンカモー。

(先生 あの人をば 好きだろうかもー。)

of(64) : センセーヌ ホレトゥリー。

(先生は 惚れてるー。)

「好意を持っている」という意味の「あの人に来る」の質問では、「イモリ」は使用されず、「好き」や「惚れている」という語と言い換えられて表現している。やはり、派生的な意味には使用しないようである。

⑮古くなる。いたんでいる。

23. 先生が作った料理が来ている。

of(80) : クサローッチ シュリー。

(腐ろうと するー。)

om(68) : センセーガ ムカシ ツクタン オモチャヌ フルサナティ。

(先生が 昔 作った おもちやが 古くなって。)

mm(54) : クサローッチ シュリー。

(腐ろうと するー。)

この表現でも、料理が先生が作ったものであっても「イモリ」は使用されない。「古くなる」「腐っている」という語に言い換えられている。

⑯空腹になる

24. 先生がお腹に来る。

om(68) : センセーノ ワタヌ ヒッシキュン。

(先生の 腹が 減って来る。)

om(65) : ナンヌ ワタヌ ヒッチモリヤー。

(あなたの 腹が 減っていらっしゃるねー。)

「空腹になる」という意味の「お腹に来る」では、om(65)に「イモリ」が「減る」という意味に後接して使用されているが、「減って来る」なのか「減って居る」で捉えているのか判断がつかねるが「イモリ」の基本義が「存在」であると考えたなら「減って居る状態で存在している」と解釈し、後項は「居る」の意味の可能性が高いと思われる。

⑪ (「・・・と来ている」の形で) ある状態である。

25. 先生はお酒が好きな上に、パチンコ好きと来ている

om(68) : センセーワ フントノ ヤキューズキダー。

(先生は 本当の 野球好きだー。)

om(65) : センセーヤ セーダカ スキンショリ、 パチンコダカ スキンリョリー。

(先生は 酒だか 好きでられて、 パチンコだか 好きでられるー。)

of(64) : コーチョーセンセーヤ ヤキュースキ アリショリヤー。

(校長先生は 野球好き あられるねー。)

mm(54) : セーダカ スキジャガ パチンコモ スキ。

(酒も 好きだけど パチンコも 好き。)

「ある状態である」という「来る」にも「イモリ」は使用されず、「好きである」という表現に言い換えられている。

⑫ (「・・・来る」の形で) ある物を取りあげていう。

26. 先生が生徒の行動で頭に来ることを話した

of(80a) : セイトヌ カマチッチ シッチャンクトウ ハナシモタットー。

(生徒の 頭に 来ること 話していらっしゃられたよー。)

om(65) : センセーヌ カマチッチキュン クトゥバリシンッチ。

(先生は 頭に来る ことばかりするって。)

mm(57) : センセーガ カマチニ ニチー、ニシチャンクトウバ ハナシュタットー。

(先生が 頭に 来てー、来ることを 話したよー。)

of(80a)に「イモリ」が使用されているが、それは「話している」の「居る」の部分に「イモリ」が後接しているのである。

敬意の対象の体の一部に「来る」のであるが、やはり基本的な敬意の対象自体の行為ではないためか「イモリ」は使用されない。

27. 先生と来たら最近怒ってばかりだ。

of(80a) : タタティモリ。

(怒っていらっしゃる。)

タタティブリ ウシュン。

(怒ってばかり 居られる。)

om(68) : センセーッチ サイキン タタティブリ ウリヤー。

(先生って 最近 怒ってばかり 居るねー。)

om(65) : チカゴロ タタティブリ モッカー。

(最近 怒ってばかり いらっしゃるねー。)

of(64) : コーチョーセンセーヤ コノゴロ オコティベリ モリヤー。

(校長先生は このごろ 怒ってばかり いらっしゃるねー。)

mm(54) : タタティモリ。

(怒っていらっしゃる。)

タタティブリ ウシュン。

(怒ってばかり 居られる。)

「先生と来たら」の「来る」はあまり解釈されず、「怒っている」の「居る」に老年層も中年層も「イモリ」を使用している。これも、「移動」の意味の派生的な表現だからであろう。「居る」の意味での「イモリ」は「状態動詞」にも後接できることが分かる。

①9こちらに向かって言いかける。

28. 先生に理屈でこられたらかなわない。

om(68) : コーチョーセンセーニ リクツブリ ヤーレバ カナワンヤー。

(校長先生は 理屈ばかり 言われれば かなわないねー。)

この「理屈で来る」という表現もインフォーマントは答えにくそうであった。よって、無回答が多く、答えてもらったとしても om(68)のように「理屈ばかり」という表現に言い換える。

②0(「・・・から来る」の形で) あることが原因となって現れる。

29. 先生が過労から来た病気にかかる。

om(68) : センセーヤ シェーギリクワシードウ ビョーキニ ナタットー。

(先生は 苦労から 病気になったよー。)

of(64) : コーチョーセンセーガ シーギリクワ シシヨリタリヤー。

(校長先生は 苦労ば されたねー。)

mm(54) : ツカレカラ キュン。

(疲れから 来る。)

「過労から来る」も「苦労をする」という表現に言い換え、「来る」は老年層では表れなかった。mm(54)では「疲れから来る」の「来る」を常態の「キュン」に言い換えていた。この項目でも「イモリ」は表れないようである。

②1ある物や状態が、その人やその人に関係の深いものに自然に生じる。

30. 先生の体が限界に来た。

om(68) : タイリョクノ ギリギリナティドー。

(体力が ぎりぎりになったよー。)

om(65) : イッパイイッパイヌ カラダニナッタ。

(いっぱいいっぱいの 体になった。)

「限界に来る」も「来る」自体使用しないようである。「なる」を使用した表現に言い換えていた。

㊸自分の心や五感に感じる

31. 先生の心にジンと来る話を生徒がした

of(80) : ココロニ ジーンッチ キュン。

(心に ジーンっと 来た。)

of 戸口(80) : ムネッチ ヒッシ モカッシ。

(胸に ヒッシ モカする。)

of(64) : センセー ハシット キュン。

(先生 ハシッと 来た。)

mm(57) : センセーヌ ココロニ ジーンチキュン ユムタバ イシャンツチュッカナー。

(先生の 心に ジーンと来た 言葉を 言ったらしいよー。)

mm(54) : ココロニ ジーンッチ キュン。

(心に ジーンっと 来た。)

「五感に来る」は「イモリ」は使用しないが「来る」の常態の「キュン」で表すことができるようである。

3.3. 「居る」の意味用法

《居る》

㊸ある場所に存在する

32. 先生は明日学校に居る

of(80) : センセーヤ アッシャ ガッコーニ モン。

(先生は 明日 学校に いらっしゃる。)

mm(57) : センセー アッシャ ガッコーツチ イモリンシュットー。

(先生 明日 学校に いらっしゃられるよー。)

基本の意味である「存在」の意味では、老年層・中年層とも「イモリ」を使用するようである。

33.先生は今日学校に居る

of(80) : センセーヤ キューヤ ガッコーニ モンチドー。

(先生は 今日は 学校に いらっしゃってるよー。)

mm(57) : センセーヤ キューヤ ガッコーツチ ウリョットー。

(先生は 今日は 学校に 居ますよー。)

イモリンショットー。

(いられっしゃられるよー。)

ウリショットー。

(居られるよー。)

「明日」の項目では「イモリ」のみであった **mm(57)**であるが、「イモリ」だけではなく、「行為主体への敬態」表現である「ウリョットー」を使用している。また、その「ウリョットー」に敬語助動詞を後接した「ウリショットー」も使用されている。

34. 先生は昨日学校に居た

of(80) : キヌーヤ ガッコーニ モタットー。

(昨日は 学校に いらっしゃったよー。)

mm(57) : センセーヤ キヌー ガッコーツチ ウリョットー。

(先生は 昨日 学校に 居られるよー。)

イモリンショタットー。

(いられっしゃられたよー。)

老年層は「イモリ」のみを使用するが、**mm(57)**は、「イモリ」と「ウリョットー」を併用する。「行く」の基本的意味のときほどではないが、「居る」の基本的意味も「イモリ」よりも「ウリョットー」の方が思いつく様子から推測すると、「ウリョットー」の方を使用するようになる可能性がある。**mm(57)**のみ「行く」「来る」「居る」の基本的意味の表現を比較してみると、「来る」「居る」「行く」の順に「イモリ」から「行為主体への敬態表現」へと形態が変化していることが分かる。中年層の「イモリ」は 3 つの意味を担いきれなくなっているのだろうか。それとも、3 つの意味のどれを表しているのか分かりにくいために、「イキョットー (行かれる)」「キョットー (来られる)」「ウリョットー (居られる)」を「イモリ」に変わる敬語として使用し始めているのだろうか。また、なぜ「来る」に最も「イモリ」を使用し、「行く」に「イモリ」が使用されなくなるのかについても問題が残る。このことについては、今回は「イモリ」の意味用法を詳細に見ていくことを重視しているため問題の所在を指摘するだけに留め今後の課題とする。また、共通語の「いられしゃる」や他の方言における「いられしゃる」相当の敬語動詞が意味領域を縮小させる傾向がある

という報告が水谷（2004）（2005）にある³⁰⁾。

㊤（鳥・虫など飛ぶものが）ある物にじっとつかまる

35. 先生の飼っている鳥が、木の上に居る。

om(68)：センセーガ ツカナトウン トウリヤ キノウエジ ウットー。

（先生が 飼ってる 鳥が 木の上に 居るー。）

of(64)：センセーヌ コーティモン トウリヌ クウィジ ウリー。

（先生は 飼っていらっしゃる 鳥の 木に 居るー。）

mm(54)：キーナンティ ウットー。

（木に 居るよー。）

敬意の対象者の飼っている鳥の存在を表すとき、「イモリ」が出てくるかの質問であるが、やはり行為主体が敬意対象でないかぎり「イモリ」は表れないようである。よって、「ウリー」という「居る」の常態が鳥の行為に対して使用されている。

また、of(64)が「飼っている」の「居る」に「イモリ」を後接している。

㊦ある地位につく。

36. 先生は生徒を指導する立場に居る

of(80)：センセーヤ セートノ シワシン タチバナ モン。

（先生は 生徒の 世話する 立場に いらっしゃる。）

mm(57)：センセーヤ クワンキャバ ギチシュン タチバダリュットー。

（先生は 子どもたちを きちっとする 立場ですよー。）

mm(54)：セキニンアン タチバニ ウットー。

（責任のある 立場に 居るよー。）

老年層では、「地位につく」のような意味の「イモリ」は使用可能のようである。ところが、中年層になってくると、「立場です」や「居る」の常態である「ウットー」で表し、「イモリ」を使用していない。of(80)以外の老年層も、この意味に「イモリ」を使用しているため、中年層では「居る」の意味範囲が縮小してきていると考えられる。

³⁰⁾ 水谷（2005）では「イラッシャル」が「行く」には用いられず「来る」「居る」に使用され続けるのは、「「イラッシャル」が敬意によって動作主の移動方向を中和するよりも、話し手が自身の関わる移動を、優先して表すようになったことにある」としている。また、そのために「「イラッシャル」が表す移動は、話し手（の視点）の位置が動作主の到達点となる＜来る＞になり、移動を表すことを同じくしながら、話し手の関わりが大きくない＜行く＞は、「イラッシャル」の意味領域から排除されることになった」としている。「イモリ」がこの傾向と同じ変化をたどっているかは現段階では言えないが、この「意味領域の縮小」という問題についても本論は関わるものである。

㊸ある場所に居を定める。住む。

37. 先生は十年前から島に居る

of(80) : センセーヤ ジューネンマエカラ シマナンティ モンチドー。

(先生は 十年前から 島で いらっしゃるってよー。)

mm(57) : センセーヤ シマジ ジューネンマエカラ ウリョットー。

(先生は 島に 十年前から 居られるよー。)

イモリンシュットー。

(いられっしゃられるよー。)

「住む」という意味は基本的な「存在」の意味と近いためか、中年層でも「イモリ」が使用されている。しかし、「ウリョットー」もやはり併用されて使われ、「イモリ」よりも「ウリョットー」の方が思いつくようである。

㊸ある種類の人間が、抽象的な意味で存在する

38. 先生には苦手な人が居る

of(80) : センセーヤ ニガテナチュノ モン。

(先生は 苦手な人が いらっしゃる。)

om(65) : ナンヤ ソンケーシュンチュノ モンヤー。

(あなたは 尊敬する人が いらっしゃるねー。)

mm(57) : センセーヤ スカランチュノ ウリョットー。

(先生は 嫌いな人が 居られるよー。)

mm(54) : キラインチュノ ウン。

(嫌いな人が 居る。)

敬意の対象の人物にとって「ある種類の人間が、抽象的な意味で存在する」場合、老年層では「イモリ」が表れるが、中年層では「ウリョットー」や常態の「ウットー」が表れる。やはり、意味がやや抽象的になってくると中年層の方では「居る」に「イモリ」を使用しなくなるようである。

㊸ある人にとって、親族・上司・部下などの社会的関係のもとで、ある人が存在する。

39. 先生には子供が二人居る

of(80) : センセーヌ クヌ ターリ モンチドー。

(先生は 子供が 二人 いらっしゃるってよー。)

mm(57) : センセーニワ クワーノ ターリ ウリョットー。

(先生は 子供が 二人 居ますよー。)

mm(54) : ターリ ウン。

(二人 居る。)

この項目も上の項目と同じ結果である。老年層では「イモリ」を使用するが、中年層では「ウリョットー」が常態の「ウットー」で表す。また、常態で表すということは、mm(54)は第三者敬語を使用しないということにもなる。

以上、「居る」の辞書の意味分類と対応させながら、「イモリ」の意味範囲を老年層と中年層を比較してきた。その結果、老年層は、行為の主体が敬意の対象者である場合は、抽象的な意味に派生した「居る」でも「イモリ」を使用することができる。老年層の「イモリ」には「存在」の意味が強いようである。「行く」「来る」での老年層の「イモリ」の意味範囲では基本的意味の「移動」にしか「イモリ」が使用できなかったことと比較すると、「居る」の意味の方が老年層の「イモリ」では根強いようだ。

一方、中年層における「居る」の意味範囲は基本的には「存在」の意味と、「住む」の意味での「居る」に対してだけ「イモリ」で表し、他の意味では「ウリョットー」を使用していた。よって、老年層と比較すると中年層の「居る」の意味での「イモリ」は基本的な「人がそこに存在する」という意味に縮小しているようである。

3.4. 動詞が一文内に複数あるときの「イモリ」

ここでは、本動詞としての「行く」「来る」「居る」の意味が「イモリ」とどれだけ結びつきが強いかを考察する。3つの意味の中で「イモリ」との結びつきに差があるのか、あるとしたらどのような順か、また老年層と中年層の「イモリ」には意味範囲に差が表れたが、基本的な「行く」「来る」「居る」の意味で比較した場合、使用の仕方に違いがあるのかを確認していく。

①先生は学校へ行って、その後私の家に来る。

of(80): センセーヤ ガッコーッチ モシ、 ウッカラアト ワキャヤッチ モン。

(先生は 学校に いらっしゃって、 その後 私の家に いらっしゃる。)

mm(57): センセーヤ ガッコーッチ イジンカラ ワキャヤッチ イモリンシュットー。

(先生は 学校に 行ってから 私の家に いらっしゃられるよー。)

この質問では、「行く」「来る」の順で質問文を作成した。結果、老年層は両方に「イモリ」を使用するが、中年層は「行く」を「行く」の「完了・結果」の意味を担う常態の「イジュリ (出る)」で表し、「来る」に「イモリ」が表れた。

先生は朝から学校に行って、夜までそこに居る。

of(80a): センセーヤ スカマラ ガッコーナンジ モシ、ユルガル ウマナンティ モン。

(先生は 朝から 学校へ いらっしゃり、夜まで そこに いらっしゃる。)

mm(57) : センセーヤ スカマラ ガッコージ イジモシー、 ユルガル ウリョンドー。

(先生は 朝から 学校に 行っていらっしゃって、 夜まで 居ますよー。)

mf(40) : センセーガ スカマラガ ヨルガリ ガッコーナンティ ウットー。

(先生が 朝から 夜まで 学校に 居るよー。)

ここでは「行く」と「居る」の順で質問文を作成している。老年層では両方に「イモリ」を使用しているが、中年層の mm(57)は「行って居る」という補助動詞の形態にし、後接の「居る」に「イモリ」を使用しているが、もう一つの本動詞の意味での「居る」には「行為主体への敬態表現」である「ウリョンドー」を使用している。mf(40)では、常態の「ウットー」で表している。

先生は私の家に来て、それから学校へ行く。

of(86) : ワギャッチ モシンカラ、 ガッコーッチ モン。

(私の家に いらっしゃられてから、 学校に いらっしゃる。)

mm(57) : センセーヤ ワギャッチ イモリショティンカラ ガッコーッチ イキュットー。

(先生は 私の家に いらっしゃってから 学校に 行くよー。)

mm(54) : ワギャッチ モシンカラ、 ガッコーッチ モンツチュッカナー。

(私の家に いらっしゃってから、 学校に いらっしゃられるらしいよー。)

mf(40) : ワギャッチ モシヤンバン、 ガッコーナンジ イキショタットー。

(私の家に いらっしゃって、 学校に 行かれたよー。)

ここでは「来る」と「行く」の組み合わせである。老年層では両方に「イモリ」が使用される。中年層では、mm(54)では両方に「イモリ」が使用されているが、mm(57)と mf(40)では「来る」には「イモリ」が使用されているが、「行く」には常態の「イキュリ」かそれに敬語助動詞が後接した形態が使用されている。

先生は朝から私の家に来て、夜までそこに居る。

of(80a) : スカマラ モシンカナ、 ユルガル モン。

(朝から いらっしゃられてから、 夜まで いらっしゃる。)

mm(57) : センセーヤ スカマラ ワギャッチ イモリンショティー、 ユーガタガリ ウリョットー／ウリショットー。

(先生は 朝から 私の家に いらっしゃってー、 夕方まで 居りますよー／居られるよー。)

mm(54) : スカマラ モシンカナ、 ユルガル モン。

(朝から いらっしゃられてから、 夜まで いらっしゃる。)

ここでは、「来る」と「居る」の組み合わせである。老年層と中年層の **mm(54)**は両方に「イモリ」を使用しているが、**mm(57)**は「来る」には「イモリ」を使用し、「居る」の部分には「ウリショットー」か敬語助動詞を後接させた「ウリショットー」を使用している。

先生は教室に居て、それから生徒の居る運動場へ行く。

of(80) : ナマンガリヤ キョーシツナン モタンバ、 ウンドージョーッチ モシヤン。

(今までね 教室に いらっしゃったんば、 運動場に いらっしゃられる。)

mm(57) : センセーヤ キョーシツニ ウリショティンカラ ウンドージョーッチ
イキショットー。

(先生は 教室に 居られてから 運動場に 行かれたよー。)

mm(54) : サッキガル モタンバ、 ウミッチ モシャットー。

(さっきまで いらっしゃったけれど、 海に いらっしゃられるよー。)

ここでは「居る」と「行く」の組み合わせで、その間に「敬意対象」より目下である「生徒」が「居る」という表現を入れた文例である。

老年層は、「生徒の居る」は解釈せず、「先生」に対応する「居る」「行く」両方に「イモリ」を使用している。それに対して、中年層では **mm(54)**は、老年層と同じように「居る」「行く」に「イモリ」を使用している。ところが、**mm(57)**では、「居る」には「ウリショットー」を、「行く」には「イキショットー」を使用し、どちらも「イモリ」が表れなかった。

先生は教室に居て、それから校長先生の居る運動場へ行く。

of(80) : ナマンガル キョーシツニ ウタンバ、 ウンドージョーッチ モタン。

(今まで 教室に 居たんば、 運動場に いらっしゃった。)

om(68) : センセーヤ ショクインシツジ モティ、 ウンドージョーッチ モン。

(先生は 職員室に いらっしゃって、運動場に いらっしゃる。)

mm(57) : センセーヤ キョーシツニ ウリショティンカラ コーチャーセンセーヌ ウリ
ヨン ウンドージョーッチ ウリヨン／キョットー／イモリンショットー。

(先生は 教室に 居られてから 校長先生が 居られる 運動場に 居られる／
来られるよー／いらっしゃられるよー。)

さきほどの質問とおなじ組み合わせではあるが、「居る」と「行く」の間に、敬意対象である「先生」よりも目上の「校長先生」が「居る」という表現を入れた文例である。

老年層の of(80a)では、「校長先生が居る」という箇所は解釈されず、「居る」は常態の「ウ

タンバ（居ったけれど）」を、「行く」には「イモリ」を使用している。また om(68)においては、「居る」と「行く」の両方に「イモリ」が使用されていた。一方、中年層の mm(57)は「校長先生が居る」の「居る」には「ウリョン」を、「先生」の動作である「居る」には「ウリショティン（居られてから）」を、「行く」の部分には「居る」と解釈して「ウリョン」、「来る」と解釈して「キョットー」を、そして次に「イモリンショットー」と答えている。しかし、これは「行く」で答えているかが疑わしい。その前が「居る」「来る」として回答しているため、どちらの意味で「イモリ」を使用しているかは判断ができかねる。

以上、ここでは「行く」「来る」「居る」が一つの文の中で 2 つ以上ある場合、どのように「イモリ」が表れるかを老年層と中年層とを比較してきた。老年層は、「行く」「来る」「居る」がどこにきても「イモリ」として表し、3つの意味が「イモリ」に平等に維持されている。ところが、中年層では「来る」は「イモリ」で表すが、「行く」と「居る」には「イキョットー」や「ウリョットー」、または動詞の常態に敬語助動詞を後接させた形態を使用する。中年層の「イモリ」は、基本的な「移動」の意味においても、「来る」との結びつきが最も強く、「行く」「居る」の意味での敬意表現は「イモリ」よりも「イキョットー」や「ウリョットー」が担ってくるようである。なぜ「来る」の意味が「イモリ」に残っていくのかは現在の段階では言及しかねるが、老年層の「イモリ」に比べて中年層の「イモリ」は意味が縮小し、それぞれの「行く」「来る」「居る」の意味範囲も基本的意味以外表わさなくなっていることが分かった。

3.5. 動詞の複合の「イモリ」

ここでは、「行く」「来る」「居る」が「行って来る」「行って居る」「来て居る」のように複合している場合、「イモリ」がどのように使用するか、老年層と中年層を比較する。

「居る」の意味で様々な動詞の後に接合する様子は、第4章と第5章で詳しく論じるが、本項では、特に「行く」「来る」が動詞に後接した場合、「イモリ」がどのような表れ方をするのか見ていくことにする。

【「行く」が後項の場合】

先生が教室から出て行く。

of(86)：キョーシツラガ イジティモツカー。

（教室から 出ていらっしゃるよー。）

mm(57)：キョーシツラガ イジティモツトー。

（教室から 出ていらっしゃるよー。）

先生が向こうまで泳いで行く。

of(80)：センセーヤ ムコーガリ オジモンツチドー。

(先生は 向こうまで 泳いでいらっしゃるってよー。)

mm(57) : センセーヤ オージイキュットー／オージイイモリショットー。

(先生は 泳いで行かれるよー／泳いでいらっしゃるよー。)

先生が向こうに走って行く。

of(80) : センセーヌ ムコーツチ ハシツチモットー／ハシツチモシットー。

(先生が 向こうに 走っていらっしゃるよー／走っていらっしゃられるよー。)

mm(57) : センセーガ アマチ ハシツチイモリンショットー／ハシツチイキョットー。

(先生が あそこに 走っていらっしゃられるよー／走って行かれるよー。)

先生が御菓子を籠に入れて行く。

of 戸口(80) : センセーガ クッシバ イレティモリー。

(先生が 菓子を 入れているよー。)

mm(57) : センセーガ クッシバ イレティモリー／ウリョットー

(先生が 菓子を 入れているよー／居られるよー。)

以上、「行く」が後項の場合の「イモリ」を調べたところ、老年層では「行く」が後項の場合、どの動詞についても「イモリ」は表れる。「泳いで行く」以外は、「テ形」を介する形態である。一方、中年層では「入れて行く」を「入れている」と解釈している以外は、「イモリ」が使用されている。しかし、「イモリ」とともに、「イキョットー」という「行為主体への形態」を表す敬意表現が使用されている。

【「来る」が後項の場合】

㊦ 46. 先生が修学旅行に行って来る

of(80) : センセーヤ シューガクリョコーツチ モシヤン。

(先生は 修学旅行に いらっしゃられる。)

om(68) : センセーガ シューガクリョコー モシモットー。

(先生が 修学旅行 いらっしゃっていらっしゃったよー。)

om(65) : センセーガ シューガクリョコーツチ モシキュンツチュッカー。

(先生が 修学旅行に いらっしゃって来るって言うよー (らしいよ。))

mm(57) : センセーヤ シューガクリョコーツチ イジキョットー。

(先生は 修学旅行に 行って来られるよー。)

mm(54) : クイムンシガ イジキュン。

(買い物をして 行って来る。)

mm(52) : センセーガ シューガクリョコーニ モシャットー。

(先生が 修学旅行に いらっしゃられるよー。)

mf(40) : シューガクリョコーツチ イジュタンチドー。／モシュタンチドー。

(修学旅行に 行ったってよー／いらっしゃられるってよー。)

「行って来る」を聞いた質問文である。回答として形態面から整理すると大きく 2 つに分けられる。それは「行って来る」を「行く」にまとめて解釈する場合と「行って来る」のように「動詞＋動詞」の形態をとる場合である。また、それぞれ動詞を「イモリ」を使用するか、常態の動詞で表すかで区別していく。

「行って来る」を「行く」にまとめて解釈しているのは、of(80)、mm(52)、mf(40)である。また、この 3 名とも「イモリ」を使用している。mf(40)は「イジュタン」という「行く」の「完了・結果」の意味を表す常態の「イジュリ (出る) ＋過去の助詞」の形態がとられている。

次に「動詞＋動詞」の形態で使用しているのが、om(68)、om(65)、mm(57)、mm(54)である。それぞれ、形態が様々なので以下に述部を抜き出し分析する。

om(68) : モシモツトー (「行く」のイモリ＋「来る」のイモリ)

om(65) : モシキュン (「行く」のイモリ＋「来る」の常態)

mm(57) : イジキョットー (「行く」の常態の「イジュリ (出る)」＋

「来る」の「行為主体への敬態」である「キョットー」)

mm(54) : イジキュン (「行く」の常態の「イジュリ (出る)」＋「来る」の常態)

「動詞＋動詞」の形態でも、「イモリ」を両方に使用してるのは、om(68)である。次に om(65)が前接の「行く」に「イモリ」を使用しているが、後接の「来る」は常態である。mm(57)と mm(54)は「イモリ」は使用していない。

結果、老年層は「行く」「来る」に対して「イモリ」を使用し、中年層は「イモリ」を使用しない傾向にある。中年層でも、mm(52)、mf(40)のように老年層に近い「イモリ」を使用するインフォーマントがいる。よってこれは、中年層における「方言習得段階の差」であると思われるが、このように形態のバリエーションが多いのも方言と共通語を相手によって切り替えて使い分ける「中年層における言語のゆれ」から来るものだろう。

先生が向こうから泳いで来る。

of(80) : センセーガ ムコーラガ オジモツトー、アレー。

(先生が 向こうから 泳いでいらっしゃるよー、ほらー。)

mm(57) : センセーヌ アマラ オヨイデイモリンショル／オージモシモル。

(先生が あそこから 泳いでいらっしゃられる／泳いでいらっしゃっていらっしゃる。)

: センセーヌ アマラ オージイモリンショル／オージキョットー。

(先生が あそこから 泳いでいらっしゃられる／泳いで来られる。)

先生が向こうから走って来ている。

of(80) : センセーヌ ムコラガ ハシッチモットー。

(先生が 向こうから 走っていらっしゃるよー。)

mm(57) : センセーヤ アマラ ハシッチモットー／ハシッチキョットー。

(先生は あそこから 走っていらっしゃるよー／走って来られるよー。)

先生が御菓子を買って来る。

of(86) : クワシバ コーティモシー。

(菓子を 買っていらっしゃられるー。)

om(65) : コーティキョタットー。

(買って来られたよー。)

om(68) : コーティキュットー。

(買って来たよー。)

mm(52) : センセーガ クワシバ コーティモットー。

(先生が 菓子を 買っていらっしゃるよー。)

mf(40) : クワシガ イッパイ コインショタンチドー。

(菓子を いっぱい 買われたってよー。)

クワシガ イッパイ コーティシチュリョットー。

(菓子を いっぱい 買って来ましたよー。)

om(65)と om(68)は「コーティモットー」も使用するが、一段敬意が下がる形態の「コーティキョタットー」や「来る」の常態を使用した「コーティキュットー」も回答として得られた。

先生の腰が曲がって来る。

of 戸口(80) : クシノ マガティモツカー。

(腰が 曲がっていらっしゃるー。)

of(80b) : マガッティキュン。

(曲がって来る。)

mm(57) : マガッティキョタットー。

(曲がって来られるよー。)

「曲がって来る」で質問したところ、「曲がる＋イモリ」を戸口集落の老年層は使用し、

of(80b)は「イモリ」ではなく、常態の「キュン（来る）」を使用した。これは、補助動詞としての「来る」の意味の「イモリ」が、「居る」の意味での補助動詞ほど定着していないからだろう。同じ80代でも、補助動詞としての「来る」の「イモリ」にはゆれがみられる。

以上、「来る」が後項の場合の「イモリ」では、老年層と中年層共に、「イモリ」は一通り使用できるようである。しかし、中年層では、「イモリ」と共に「キョタットー」という「行為主体への形態」を表す敬意表現が使用されている。また、文型も中年層の方がバリエーションが豊富である。「曲がって来る」には、中年層は「イモリ」は言えなくなっている。

【「居る」が後項の場合】

先生は去年修学旅行に行って居た。

of(80)：シューガクリョコーッチ モシモン。

（修学旅行に いらっしゃっていらっしゃる。）

mm(57)：センセーヤ キヌー ダーッチ イジモタンヨー。

（先生は 昨日 どこに 行っていらっしゃったのー。）

これは「行く」と「居る」の複合である。老年層はどちらも「イモリ」で表す「モシモットー」という表現になる。中年層は「行く」の常態「イジュリ（出る）」に「来る」の「イモリ」が複合した「イジモタン」という表現になる。老年層に「イジモタン」についてどう思うか尋ねたところ、「あれは、「イジュリ」を使っているから敬語じゃない。」という教示を得た。老年層の意識としては「イモリ」を後接させていても「行く」の部分が「イモリ」ではないと、敬意表現だとみなさないようである。老年層にとっての「イモリ」が「行く」「来る」「居る」の意味を維持しているためであろう。

中年層からよく、「モさえつければ敬語になるからね。」という教示を得る。よって、中年層では「イモリ」が「行く」「来る」「居る」の尊敬語というより、「イモリ」さえつければ敬意を表すことができると考えているので、形式的な「イモリ」の用い方に変化しているのだろう。

先生は修学旅行に来て居る。

of(80)：シューガクリョコーッチ モシモンッチドー。

（修学旅行に いらっしゃっていらっしゃるってよー。）

mm(57)：センセーヤ キヌヤ チーモシュリョタットー。

（先生は 昨日は 来ていらっしゃられたよー。）

これは「来る」と「居る」との複合の文例である。老年層は、「来る」「居る」ともに「イモリ」を使用するため「モシモン」という形態になる。中年層では、「来る」が常態で「居る」が「イモリ」、それに敬語助動詞が付いた「チーモシュリョタットー」という表現になる。

以上、動詞の後項に「行く」「来る」「居る」がそれぞれ接合した場合、「イモリ」がそのように表れるかを世代差の観点から考察した。老年層、中年層ともに前項の動詞に関係なく「行く」「来る」「居る」が後項だとある程度「イモリ」で表すことができた。中年層では前項の「行く」「来る」は「イモリ」を使用しない傾向がある。

また、中年層では「イモリ」だけではなく、「イキョットー（行かれる）」「キョットー（来られる）」のような「行為主体への敬態表現」の形態が併用されている。今後、この形態が主流になるものと予測される。

第4章 老年層の「居る」の補助動詞的用法

第4章 老年層の「居る」の補助動詞的用法

工藤(2004b)では、「〈変化動詞＝内的終了限界のある動詞〉であり、〈動作動詞＝内的開始限界のある動詞〉である」ことを基に、動詞を「主体変化動詞」「主体動作客体変化動詞」「主体動作動詞」の3つのグループに分けた。また、「主体変化動詞」と「主体動作客体変化動詞」をそれぞれ「位置変化」と「状態変化」に分け、「主体動作動詞」を「他動詞」「自動詞」とに分けた。

本論文では、奄美方言のテンス・アスペクトを調査目的としているわけではない。しかしながら、存在動詞である「居る」の意味での「イモリ」の補助動詞化が老年層を中心に盛んに使用されている現状があり、それらがどのような動詞に複合しているか全体像を捉えるために、アスペクトによる動詞分類を行っていた工藤(2004b)の分類からそれぞれ2つずつ選定した。

「行く」「来る」は「主体変化動詞」の〈位置変化〉にあたる動詞であるが、「イモリ」に関わる動詞のため、別に扱い、「行く」「来る」の後項の「居る」の意味での「イモリ」として項目を立て「現在」「未来」「過去」の時間軸ごとに「完了・結果」「進行」の老年層による使用を見ていくことにする。

4.1. 「行く」の後項の「イモリ」

【現在の完了・結果】

先生が学校に行っている

of(86) : センセーガ ガッコーツチ モシュリョットー。

(先生が 学校に いらっしゃいますよー。)

of(80a) : センセーヤ ガッコーナンジ モロヤー。

(先生は 学校へ いらっしゃるよー。)

センセーヤ ナマ ガッコーツチ モシモットー。

(先生は 今 学校に いらっしゃっていらっしゃるよー。)

of(60) : イジモシュットー。

(行っていられられるよー。)

80代の老年層では「行って居る」を「行く」とひとまとめに考え、「イモリ」の本動詞用法と同じ形態を使用していた。また、of(80a)では、「行って居る」と捉え「イモリ+イモリ」の形態である「モシモットー」も回答として得られている。

of(60)はof(80a)の娘にあたる。of(60)では「行っている」の「行く」を常態の「イジュリ(出る)」、「居る」の部分に「イモリ」を使用した「イジモシュットー」の形態をとる。これは、中年層によく見られる形態である。

【現在の進行】

先生が学校に行っている

of(86) : センセーガ モシモットー。

(先生が いらっしゃっていらっしゃるよー。)

of 戸口(80) : ナマ モシヤッカー。

(今 いらっしゃられるよー。)

of(80a) : センセーヤ ナマ ダーッチ モローツチカヤー。

(先生は 今 どこに いっていらしゃてるかなー。)

om(73) : イマ ガッコーツチ モシンヤ アリョランカイ。

(今 学校に いらっしゃって あられないかい。)

イマ ガッコーツチ イキカタ アリョランカイ。

(今 学校に 行きかた あられないかい。)

om(68) : イキカタ ダリョットー。

(行きかた ですよー。)

of(64) : モヨカタ シーモリヤー。

(いらっしゃりかた していらっしゃるねー。)

老年層の中でも、「イモリ」を「行く」「来る」「居る」の本動詞・補助動詞にほとんど使用する 80 代に比べて、60 代では、一部「動詞の常態＋敬語助動詞」の形にすることで敬意を表現する用法が見らる。

また「完了・結果」とほぼ同じ形態を使用する老 80 代に対して、60 代と 70 代から「～シカタ (～する途中)」が動詞に後接することで「進行」の形態をとる。これは、「～カタ」に「進行」の意味があるので、80 代と比較すると「イモリ」には「進行」の意味が薄れてきているためだろうか。

【未来の完了・結果】

私が明日家を出るころには先生は学校に行っているだろう

of(80a) : アッシャ ガッコーツチ モシモンダロヤー。

(明日 学校に いらっしゃっていらっしゃるだろうや。)

of 戸口(80) : アッシャ ガッコーツチ モシュロー。

(明日 学校に いらっしゃるだろー。)

om(73) : モー ガッコーツチ イモリョン アリョランカイ。

(もー 学校に いらっしゃられ あられないかい。)

of(80a)では「行って居る」に「イモリ＋イモリ」の形態である「モシモットー」を使用

している。of 戸口(80)と om(73)は、「行つて居る」を「行く」とひとまとまりに考えて「イモリ+敬語助動詞」の形態をとっている。

【未来の進行】

私が明日家を出るころには先生は学校に行っているだろう

of(86)：センセーガ ガッコーツジ モシュントロー。

(先生が 学校に いらっしゃるところ。)

of(80a)：ワガ ヤーイジタンコロヤ ガッコーツチ ムカトウントロダリヨリョヤー。

(私が 家を出たころは 学校に 向かつてるところでしょうねー。)

of(86)では「イモリ」の後に「～トロー (～ところ)」を付けることで「進行」の意味を表わしている。of(80a)では、「行く」ではなく「向かう」に「トロー (～ところ)」をつけて「進行」の意味を表わしている。

【過去の完了・結果】

先生は昨日どこに行っていたのか

of(86)：キヌー ウミイジモシャットー。／イジキョタットー。

(昨日は 海に 行っていらっしゃったよー。／行かれたよー。)

of(80a)：センセーヤ キヌーヤ ガッコーツチ モシュタン。

(先生は 昨日は 学校に いらっしゃった。)

of(60)：イジモシャットー。

(行っていらっしゃられるよー。)

of(60)はこの質問に対して、「モショットー」も答えているが、「行く」の意味の常態「イジュリ (「行く」の完了・結果)」に「居る」の意味で補助動詞化した「イモリ」を複合させた「イジモシャットー」を使用している。これは、現在の「完了・結果」の質問でもこの形が得られたので、補助動詞として定着していると考えられる。of(86)は 80 代の後半でありながら、中年層のように「イジュリ+イモリ」の「イジモシャットー」を使用している。また「行為主体への敬態」である「キョタットー (行かれたよー)」を使用していることから、やはり中年層と使用している形態に近いことが分かる。

of(80a)では、「行っている」を「行く」とひとまとめにして「モシュタン (イモリ+敬語助動詞+過去の助詞)」の形態をとっている³¹⁾。

³¹⁾ 老年層の特に 80 代では「～ている」表現を「動詞+動詞」ではなく、ひとまとめにして表す傾向がある。「～ている」表現を本動詞用法と区別していなかったのだろうか。ここでは、形態面を述べ、今後の問題として扱う。

【過去の進行】

先生は昨日どこに行っていたのか

of(80a) : センセーヤ キヌーヤ ダー モシモーテヨー。

(先生は 昨日は どこにいらっしゃっていらっしゃったのー。)

センセーヤ キヌーヤ ダー モシティヤー。

(先生は 昨日は どこに いらっしゃたのー。)

of 戸口(80) : ダーッチ モローッチ アタカイ。

(どこに いらっしゃろうと あったのかい。)

om(73) : ダーッチ イモリュンドロ アリョタカイ。

(どこに いらっしゃるところ あられたかい。)

of(64) : モヨカタ シーモタットー。

(いらっしゃりかた していращやたよー。)

of(80a)と of 戸口(80)では「行っている」を「行く」とひとまとめにした「モシティヤー」や「モロー」を使用している。また、of(80a)は、「行っている」を「行く」「居る」にそれぞれ「イモリ」を使用した「モシモーテヨー」も用いている。80代は「完了・結果」と「進行」の形態にさほど差はないようだ。

om(73) は「イモリュンドロ」という「イモリ+敬語助動詞+ドロ(～ところ)」を、of(64) は「モリカタ」という「イモリ+カタ(～途中)」で「進行」の形態をとっている。「ドロ」「カタ」を使用するということは、「イモリ」だけでは「進行」の意味を表さないためだろう。

以上、「行く」に後接する「イモリ(居る)」をそれぞれ、「現在」「未来」「過去」と「完了・結果」「進行」に分けて確認してきた。時間軸によって「イモリ」の表れ方は活用レベルでしか左右されず、「完了・結果」「進行」を表す際に「カタ」「ドロ(トロ)」を「イモリ」に後接することで「進行」の意味を表わしていることが分かった。

また、老年層は「行っている」をひとまとまりとして捉えるか、「行く」「居る」としてそれぞれに「イモリ」を使用する「モシモットー」という形態が主流のようである。老年層でも60代においては、「行く」の部分を常態の「イジュリ(出る)」にした「イジモットー」という表現が見られるようになり、これが中年層になると頻繁に表れてくるようになる。

4.2. 「来る」の後項の「イモリ」

ここでは、「来る」に後接する「居る」の意味の「イモリ」を「現在」「未来」「過去」の時間軸と「完了・結果」「進行」とでどのような違いを見せるかを確認していく。

【現在の完了・結果】

先生が学校に来ている

of(80a) : センセーヌ ワキャヤッチ モシモン。

(先生が 私の家に いらっしゃっていらっしゃる。)

センセーヌ ワキャヤッチ アソビガモシシュリョットー。

(先生が 私の家に 遊びにいらっしゃってますよー。)

of(64) : モシモットー。

(いらっしゃっていらっしゃるよー。)

of(80a)は、「イモリ+イモリ」の「モシモットー」を使用している。

60 代の of(64)でも、この質問に対して「モシモットー」が得られた。of(64)は、「色がよくなって行く／来る／居る」に対しても、「イッチャナティモリヤー（よくなっていらっしゃる）」のように「イモリ」を使用していた。60 代ではあるが、80 代のように「行く」「来る」「居る」が本動詞であろうが、補助動詞であろうが「イモリ」をさかんに使用している。

「行っている」と比較すると、老年層では「行く」とひとまとめにして回答が多かったが、「来ている」では「来る」と「居る」の両方に「イモリ」を使用するようである。

【現在の進行】

先生が学校に来ている

of(86) : センセーガ ムカトゥリョットー。

(先生が 向かってますよ。)

om(68) : センセーガ クマチ モンニシシュットー。

(先生が こっちに いらっしゃられるところよー。)

of(80a)では、「来る」ではなく「向かう」を使用することで「進行」の意味を表わしている。om(68)では、「イモリ」に「ニシ」という「～するところ」という意味の語で「進行」の意味を補っている。

【未来の完了・結果】

私が家に帰るころには先生は家に来ているだろう

of(80a) : ワキャヤッチ モシモンダロヤー。

(私の家に いらっしゃっていらっしゃるだろうや。)

ワキャヤッチ モシモットー。

(私の家に いらっしゃていらっしゃるよ。)

of(80)では「来ている」の「来る」「居る」それぞれに「イモリ」を使用した「モシモン」「モシモットー」が用いられている。

【未来の進行】

私が家に帰るころには先生は家に来ているだろう

of(80b) : ワキャヤッチ モリカタシュンドロヤー。

(私の家に いらっしゃりかたするところだろうね。)

om(73) : ナー ヤガティ モンカモドー。

(なー やがて いらっしゃるかもよー。)

ワキャヤッチ ムカティモットー。

(私の家に 向かっていらっしゃるよー。)

ワキャヤッチ アッチモットー。

(私の家に 歩いていらっしゃるよー。)

of(64) : モヨカタ シーモリヤー。

(いらっしゃりかた していращやるねー。)

of(80b)は、「イモリ」に「カタ (～途中)」を後接させた「モリカタ」で「進行」の意味を表わしている。

om(73)は「来る」とひとまとまりに解釈した「モンカモドー」を使用し、また「向かう」と「歩く」の意味の語を使用して「進行」の意味を持たせていた。

of(64)の「モヨカタ」は「イモリ (来る) + カタ (～途中)」の複合である。「シーモリヤー」は「サ変 + イモリ (居る) + 終助詞ヤー」だろう。of(64)は、この「モヨカタシーモリヤー」を「行っている」の現在進行と過去進行の意味においても同じ形態を使用している。したがって、未来進行では「モシュロー (いらっしゃるだろう)」を使用しているが、「モヨカタシーモリヤー」が使える可能性が高い。また、「来ている」の未来進行にも使用しているので、現在進行と過去進行は回答として得られていないが、こちらも「行っている」と同様な形態が使用可能だと考えられる。

80代のインフォーマントも含めるとこのような表現は見られなかった。of(64)は60代ではあるが、年上に対しての「イモリ」を使用する意識がより高いためと考えられる³²⁾。

【過去の完了・結果】

先生は昨日学校に来ていた

of(80a) : キヌヤ スカマホッサラガ ガッコーッチ モシュタットヤー。

(昨日は 朝早くから 学校に いらっしゃったよー。)

³²⁾ このような of(64)のような老年層とほぼ変わらない用法の中年層が何名がいた。よって、世代差だけではなく、方言習得の段階からも分けて考察する必要があるだろう。

キヌヤ スカマホッサラガ ガッコーチ モシモタットー。

(昨日は 朝早くから 学校に いらっしゃっていらしゃったよー。)

of(80)は、「来ている」を「来る」とひとまとまりに考える「モシタットヤー」と「来る」「居る」それぞれに「イモリ」を使用した「モシモタットー」を用いている。

【過去の進行】

先生は昨日学校に来ていた

of(80a)：センセーヌ キューヤ ワキャヤッチ モシタンドロ ドウシヌミタ。

(先生が 今日は 私の家に いらっしゃたところを 友達が見た。)

of(80a)は「イモリ」に「ドロ (～ところ)」を後接させた「モシタンドロ」で「進行」の意味を表している。

以上、老年層における「来る」の後項につく「イモリ (居る)」を「現在」「未来」「過去」と「完了・結果」「進行」に分けみたところ、老年層でも 80 代は「完了・結果」「進行」の形態がほぼ同じで、数例「カタ」「ドロ (トロ)」などを「イモリ」に後接させ「進行」の意味をもたせたものがあつた。だが、ほとんど「来る」とひとまとめに解釈するか「来る」「居る」それぞれ「イモリ」を使用した「モシモットー」という表現が主流であつた。また、「行っている」と比較すると、「行っている」はひとまとめに「行く」として解釈する回答が「イモリ+イモリ」の形態より多かつたが、「来ている」では「来る」とひとまとめに解釈するより、「イモリ+イモリ」の形態が多いことが分かつた。

また、60 代、70 代では「カタ」「ドロ (トロ)」「ニシ」を「イモリ」に後接することで「進行」を表すことから、「イモリ」だけで、「進行」の意味を表わさなくなっているようである。

この結果から、前接の「行く」「来る」では、老年層の中でも「行く」より「来る」の方を優先的に「イモリ」に置き換える傾向があるようである。これが、中年層の本動詞の「イモリ」になると、ほぼ「来る」のみ「イモリ」に置き換え、「行く」「居る」は「イキョットー」「ウリョットー」の形態を使用して行くこととつながりがあるだろう。しなしながら、なぜ「来る」の意味が「イモリ」に維持されていくのかは、現段階では判断しかねるので、今後の課題としたい。

4.3. 主体変化動詞の補助動詞用法

「主体変化動詞」は工藤(2004b)(P 45)の用語であるので、説明を引用する。

「死ぬ、来る、座る、開く」のような、自動詞の内的限界動詞³³⁾で、主体の観点から変化を捉えている動詞。標準語を対象にした金田一論文では「瞬間動詞」とされているが、諸方言まで視野に入れた場合には、「幕が開きよる」のように進行過程を表せることから、主体変化動詞と規定しておくことにする。

以下、この動詞分類をもとに「イモリ」との関わりをみていく。

4.3.1 「行く」「来る」以外の位置変化動詞

【「出る」の完了・結果】

先生が教室から出ている

of(80a) : センセーヤ キョーシツカラ イジティモティヨー。

(先生が 教室から 出ていらっしゃてよー。)

of 戸口(80) : イジティモリ

(出ていらっしゃるー。)

【「出る」の進行】

先生が教室から出ている

of(86) : イジティモリカタジャー。

(出ていらっしゃりかただねー。)

of(80a) : センセーノ ダーツチカ モローツチ イジティモットー。

(先生が どこにか いらっしゃろうと 出ていらっしゃるよー。)

センセーノ ダーツチカ イジローツチ シーモットー。

(先生が どこにか 行こうと していращやるよー。)

「完了・結果」では「出る」の常態「イジュリ」に「テ形」を介した「イモリ」の「イジティモリー」、「進行」では of(80a)は「完了・結果」と形態は変わらないが、of(86)は「カタ」を「イモリ」の後につけ「進行」の意味を補っている。

³³⁾ 工藤 (2004b) による「内的限界動詞」と「非内的限界動詞」の説明を引用する。

「そこに至れば必然的に運動が終了し、主体または客体に必然的結果が生じる内的終了限界をもつ動詞グループ。下記の〈主体変化動詞〉と〈主体動作客体変化動詞〉は、ともに内的限界動詞である。内的限界の有無による動詞の2分類が有効かどうかは言語によって異なる。ウチナーヤマトグチ (沖縄本島諸方言) では、「窓が開いてーる」「先生が窓開けてある」のように、〈主体結果〉と〈客体結果〉が異なる形式で表されていることから、一括化は有効ではない。」

「どこで終っても、運動が成立したといえる、必然的結果を生じないタイプの動詞グループ。下記の〈主体動作動詞〉は、非内的限界動詞である。なお、「歩く、読む」のような非内的限界動詞でも「駅まで歩く」「10頁読む」のように外的限界づけは可能である。」

【「入る」の完了・結果】

先生が教室に入っている

of(80a) : センセーヌ ホッチモシュットー。

(先生が 入っていらっしゃられるよー。)

【「入る」の進行】

先生が教室に入っている

of(80a) : センセーヌ キョーシツヌ イローッチ シーモツトー。

(先生が 教室に 入ろうと していられっしゃるよー。)

「入る」の「完了・結果」では「「入る」の常態+テ形+イモリ+終助詞」の「ホッチもシュットー」が使用されている。

「進行」では、「入ろうとしている」という「～ている」表現を「入る」に接合させている。「入る+テ形+サ変+イモリ+終助詞」の形態で「完了・結果」の形態に「サ変」を加えることで「進行」の状態を表している。

4.3.2 状態変化動詞

【「座る」の完了・結果】

先生が椅子に座っている

of(80a) : センセーヌ イスナンジ イシモツトー。

(先生が 椅子に 座っていらっしゃるよー。)

【「座る」の進行】

先生が椅子に座っている

of(80a) : イスナンジ イローッチ シーモツトー。

(椅子に 座ろうと していられっしゃるよー。)

ここでも「入る」のときと同じように、「「座る」の常態+イモリ+終助詞」が「完了・結果」を、「「座る」の常態+テ形+サ変+イモリ+終助詞」が「進行」を表している。

【「立つ」の完了・結果】

先生が立っている

of(80a) : タッチモン。

(立っていらっしゃる。)

【「立つ」の進行】

先生が立っている

of(80a) : タトーッチ シーモツトー。

(立とうと していらっしゃるよー。)

ここでも「入る」のときと同じように、「立つ」の常態+テ形+イモリ」が「完了・結果」を、「立つ」の常態+テ形+サ変+イモリ+終助詞」が「進行」を表している。

【「死ぬ」の完了・結果】

先生が死んでいる

of(86) : モーリックワシヤン。

(いられなくなりました。)

シジモツトー。

(死んでいられよう。)

of(80a) : センセーガ モランナティドー。

(先生が いられなくなりましたよー。)

【「死ぬ」の進行】

先生が死んでいる

of(80a) : ヤットウンカッタウン ドー。

(やっとかつと だよー。)

モー ダメカモ ドー。

(もー だめかも よー。)

「死ぬ」の「完了・結果」では、of(86)が「死ぬ」の常態に「イモリ」を後接した「シジモツトー」を用いている。また、「居なくなった」と解釈し、本動詞の「居る」の「イモリ」である「モーリックワシヤン」を使用している。of(80a)も「居なくなった」と解釈し、本動詞の「居る」の意味で「イモリ」を使用している。

「死ぬ」の「進行」では、なかなか敬意の対象相手に想定しにくいようであった。

4.4. 主体動作客体変化動詞の補助動詞用法

ここでも同じく「主体動作客体変化動詞」は工藤(2004b)の用語であるので、説明を引用する。

「殺す、開ける、壊す」のような、他動詞の内的限界動詞で、客体の側に変化を

もたらす主体の動作を捉えている動詞。

前接する動詞によって「イモリ（居る）」の表れ方に違いがあるのか、「行く」「来る」が前接している場合との違いがあるのかをみていくことにする。また、ここでも「完了・結果」「進行」の大まかに動詞を分ける。

4.4.1 位置変化動詞

【「出す」の完了・結果】

先生が水槽から水を出している

of(80a)：センサーガ スイソーカラ ムズ イジャシモツトー。

(先生が 水槽から 水 出していらっしゃるよー。)

【「出す」の進行】

先生が水槽から水を出している

of(80a)：イジャシカタシーモツトー。

(出しかたしていらっしゃるよー。)

ここでは「「出す」の常態＋イモリ」が「完了・結果」を、「「出す」の常態＋カタ＋サ変＋イモリ＋終助詞」で「進行」を表している。「カタ」を挿入することで「出す」ことが「進行」し、「シーモットー」で「その状態である」を意味して表現しているのだろうか。

【「入れる」の完了・結果】

先生が水槽に水を入れている

of(80a)：ムズ イレオワータットー。

(水 入れ終わったよー。)

【「入れる」の進行】

先生が水槽に水を入れている

of(80a)：ミズバイリカタシーモツトー。

(水を 入れ方していらっしゃるよー。)

「入れる」では「終る」を使用することで「完了・結果」の意味を補い、「「入れる」の常態＋「終る」＋過去助詞＋終助詞」の形態をとる。「イモリ」は使用されていない。「進行」では、「「入れる」の常態＋カタ＋サ変＋イモリ＋終助詞」の「イリカタシーモットー」で表している。「カタ」がやはり動作の「進行」を表し、「シーモットー」でその状態に敬意を加えるために「イモリ」が使用されているのだろう。

4.4.2 状態変化動詞

【「開ける」の完了・結果】

先生が窓を開けている

of(80a) : センセーヌ ヤド アケオワータットー。

(先生は 窓開けて終わったよー。)

ホーティウシヤン。

(開けていますよ。)

【「開ける」の進行】

先生が窓を開けている

of(86) : アケティウントロ。

(開けているところ。)

アケティウッシャントコロ。

(開けておられるところ。)

of(80a) : センセーヌ ヤド ホーカタシモットー。

(先生が 窓 開けかたしていらしゃるよー。)

センセーヌ ヤド アケカタシモットー。

(先生が 窓 開け方していらっしゃるよー。)

「開ける」の「完了・結果」は「終る」で表現するようである。

「進行」では、やはり「トコロ」「カタ」を挿入することで「進行」を表し、of(80a)は「ホーカタシモットー」という「サ変」に「イモリ」を後接した表現を使用している。

【「切る」の完了・結果】

先生が紙を切っている

of(80a) : ハサミシ カミバ キリオワリショタットー。

(はさみで 紙を 切り終わられたよー。)

ハサミシ カミバ キリワーティウッシャリショタン。

(はさみで 紙を 切り終わっておられているよ。)

【「切る」の進行】

先生が紙を切っている

of(80) : ハサミシ カミバ キチモタットー。

(はさみで 紙を 切っていちゃったよー。)

「切る」のような瞬間的な動作での「完了・結果」には「終る」を使い「イモリ」は使用されない。

「進行」の意味では「キチモタットー」という「「切る」の常態+テ形+イモリ」では「イモリ」が使用され、「カタ」などの語は後接していない。それは「切る」という動作に「過程」がないためか。

4.5 主体動作動詞の補助動詞用法

ここでも工藤(2004b)より「主体動作動詞」の用語説明を引用する。

非内的限界動詞で、「歩く、遊ぶ」のような自動詞の場合も、「飲む、叩く」のような他動詞の場合もある。標準語を対象にした金田一論文では、主体動作客体変化動詞と主体動作動詞が一括されて「継続動詞」とされているが、諸方言まで視野にいたした分析では、言語変化の方向性を捉えるためにも、両者の区別が必要である。(例えば、西日本方言の「歩いとる」は〈痕跡(偶然的結果)〉〈動作進行〉を表すが、「開けとる」は〈客体結果〉〈痕跡(偶然的結果)〉を表す。「開けとる」が〈動作進行〉をも表すようになっているかどうかは、方言によって異なる。)

このような動詞に後接した「イモリ(居る)」がどのような形態を見せるのか、他の動詞とも比較しながらまとめたい。また、こちらも大まかに「完了・結果」「進行」に分け質問をした。

4.5.1 自動詞

【「走る」の完了・結果】

先生が走っている

of(80a): センセイヌ ジュッキロモ ハシッテモットー。

(先生が 十キロも 走っていらっしゃるよー。)

【「走る」の進行】

先生が走っている

of(86): センセイヌ カケアシシ ハシッチモツカー。

(先生は 駆け足して 走っていらっしゃるよー。)

of(80a): センセーワ ハシッチモットー。

(先生は 走っていらっしゃるよー。)

「走る」は「継続している」動詞である。そこで「完了・結果」のどのように当該地域

で表現するかを確認したかったので、「十キロも」という語を入れることで動作が終了した後の人物の様子をどのように表すか質問した。of(80a)は「走る」の常態+テ形+イモリ+終助詞」の形態で表現した。また、「進行」の方を見ると、「完了・結果」の形態と同じであった。「進行」の方が回答しやすいようであった。「完了・結果」で「十キロも」を挿入しなければ、「終る」を入れて「完了・結果」の意味を表わした可能性もある。

【「泳ぐ」の完了・結果】

先生が海で泳いでいる

of(80a)：センセーガ ウミナンジ オジオワータットー。

(先生が 海で 泳ぎ終わったよー。)

【「泳ぐ」の進行】

先生が海で泳いでいる。

of(80a)：センセーガ ウミナン オジモン。

(先生が 海で 泳いでいらっしゃるよー。)

こちらも、「動作が継続している」動詞で、「進行」の方に「イモリ」を使用し、「完了・結果」には「終る」を挿入することで表し分けている。

4.5.2 他動詞

【「食べる」の完了・結果】

先生がご飯を食べている

of(80a)：ゴハン ミショティオワッテモットー。

(御飯 召し上がって終わっていらっしゃるよー。)

ゴハン ミショリショタン。

(御飯 召し上がられた。)

【「食べる」の進行】

先生がご飯を食べている

of(86)：ゴハン ミショリカタ。

(御飯 召し上がる途中。)

「食べる」には「召し上がる」という意味の敬語動詞「ミショリ」がある。よって、「食べる」自体を敬語動詞に言い換える。しかし、「食べる」も「動作の継続している状態」を表す動詞なので、「完了・結果」を無理に答えてもらったところ「終る」に「居る」の「イモリ」を後接した「オワッテモットー」という形態が表れた。「進行」は「食べる」だけで

も動作は進行を表すのだが、強調するためか「カタ」を使用し、「食べている最中」のような意味の形態が表れた。それとも「ミショリ」自体に「カタ」を付加しないと「進行」の状態を表せなくなっているのだろうか。この「ミショリ」も「イモリ」と並んでよく聞かれる敬語動詞なので、「敬語動詞」としての「イモリ」との関係を調べていきたい。

【「見る」の完了・結果】

先生がテレビを見ている

of(80a) : センサーガ テレビ ミシオワタン。

(先生が テレビ 見て終わった。)

【「見る」の進行】

先生がテレビを見ている

of(86) : ナマ センサー ヒトリデ ニショリカター。

(今 先生 一人で 見られかたー。)

of(80a) : センサーガ テレビ ミシモツトー。

(先生が テレビ 見ていらっしゃるよー。)

ここでも「終る」を挿入することで「完了・結果」を表し、「見る」の常態に「カタ」を後接するか、「見る」の常態に「イモリ」を接する形で「進行」を表している。

【「読む」の完了・結果】

先生が本を読んでいる

of(80a) : センサーガ ホンオ ヨミオワリショタン。

(先生が 本を 読み終わられた。)

【「読む」の進行】

先生が本を読んでいる

of(80a) : センサーガ ホンオ ユディモン。

(先生が 本を 読んでいらっしゃる。)

ここでも「終る」を挿入することで「完了・結果」を表し、「読む」の常態に「カタ」を後接するか、「読む」の常態に「イモリ」を接する形で「進行」を表している。

以上、工藤(2007)の動詞分類に基づく後項の「イモリ」の形態を「完了・結果」「進行」に分けて考察してきた。以下、動詞分類ごとにまとめる。

4.6 その他の語に後接する補助動詞用法

先生は若いころから苦勞をして来た。

of(80b) : ナンゲックァ シャンツチュッカナー。

(難儀を したと言うよー。)

om(65) : センセー ワーサンコロヤ ナンギブリ シーモシー。

(先生は 若いころから 難儀ばかり していっしやったー。)

of(80a)は、「難儀をする」と解釈しているので、「来る」は使用しないため「イモリ」があらわれない。om(65)でも「難儀をする」に「居る」を後接し、「イモリ」を使用しているが、「来る」の意味ではない。

先生がどんどん部屋をかたづけて行く。

of(64) : コーチョーセンセーヤ ドンドン カタズケティモリヤー。

(校長先生は どんどん かたづけていっしやるよー。)

of(60) : ダンダン ヤーノ キョラサナティキョタリヤー。

(だんだん 家が きれいになって来られたねー。)

of(68) : センセーバ ヤーバ カタスケティイキュットー。

(先生が 家を 片づけて行く。)

of(64)では、「カタズケ (かたづける) + イモリ (行く)」を使用しているが、om(68)では「行く」の意味での補助動詞「イモリ」は使用せず、常態の「イキュリ (行く)」を「カタスケ (かたづける)」に複合させている。

また of(60)は「かたづけて行く」ではなく、「かたづけて来る」と解釈し、「キュン (来る)」より一段敬意の高い「キョン (来られる)」を使用してる。西日本方言では「聞き手視点」の考え方から「行く」というところを「来る」で表現する場合があるが、ここは移動を表す場面ではない。「かたづけて行く」に「来る」を使用しているのは、本来の移動の意味が抽象化し、このような進行の意味にも使用されるようになった例なのかもしれない。

また、次の回答は「結婚している」「似ている」「空いている」のような語には「イモリ」がどのように表れるか、質問したものである。

先生は結婚している

of(80a) : センセーヤ イマ ケッコン シモンニヤー。

(先生が 今 結婚 していっしやるよー。)

先生は両親と顔が似ている

of(80a) : センセーヌ ウヤトゥー ムルニシモツトー。

(先生は 親と とても似ていらっしゃるよー。)

センセーヌ ウヤトゥー ムルニショッカー。

(先生は 親と とても似ておられるよー。)

先生の手が空いている

of(80a) : センセーヌ チヌ アシモシニャー。

(先生の 手が 空いていらっしゃるよー。)

以上の結果より、老年層における「イモリ」は「動作主体(=敬意対象)が～している状態で存在している」という意義素が抽出できると考えられる。

それは、「完了・結果」「進行」で大まかに分け質問したところ、「イモリ」に前接する動詞によって「カタ」「ドロ」などの語が「進行」の意味を担い、「終る」を動詞に後接することで「完了・結果」を表してはいるが、どちらにも「イモリ」は使用できた。また、80代は語を補わなくても同じ形態で「完了・結果」「進行」を表していることから、「イモリ」の担う意味が縮小している様が 60代や 70代の用例から分かる。しかし、「イモリ」の「何が」縮小してきているのかについて、今回の調査ではまだはっきりしない。

第 5 章 中年層の「居る」の補助動詞的用法

第5章 中年層の「居る」の補助動詞的用法

この章では、「居る」の意味で動詞に後接する「イモリ」を考察する。

まず、「行く」「来る」の後項にくる「イモリ」について、「現在」「未来」「過去」の時制ごとに分け、それぞれ「完了・結果」と「進行」を意味するとき、どのように中年層では「イモリ」が使用されるかをみていく。また、「行く」「来る」以外の動詞が前項にくる「～ている」表現では、「イモリ」が使用されるのか、されるとしたらどのような形態をみせるのかについても詳しく見ていく。

「居る」の意味の「イモリ」が中年層ではどのように表すか、全体像を捉えるため、テンスやアスペクトを大まかに学校英語で使用される程度の「現在」「未来」「過去」と「完了・結果」「進行」に分けた。特にアスペクトは諸研究者の中でどのように動作を捉えるかの違いでさまざまな用語があるが、本論文では奄美方言のアスペクトについて詳しくみていくことが目的ではなく、「イモリ」が動詞の後項にくる場合の様子を見せるかに焦点がある。よって、大まかにあるひとまとまりの動作、動作が完了した状態を「完了・結果」とし、動作が進行中であると捉える場合「進行」としている。

5.1. 「行く」の後項の「イモリ」

【現在の完了・結果】

先生が学校に行っている

mm(57) : センセーヤ ガッコーニ ツチモットー。

(先生は 学校に 着いていらっしゃるよー。)

: イジモットー。

(行っていられっしゃるよー。)

【現在の進行】

先生が学校に行っている

mm(57) : ナマ センセーヤ ガッコーチ ムカトウリョットー。

(今 先生は 学校に 向かってますよー。)

: モリカタ ダリョットー。

(いらっしゃりかた ですよー。)

中年層は後項の「居る」は「イモリ」に置換えるが、前項の「行く」では常態を使用するようである。

【未来の完了・結果】

私が明日家を出るころには先生は学校に行っているだろう

mm(57) : ワガ アッシャ ガッコーニ キュンコロヤ センセーヤ ガッコーニ

ウリョンハズドー。

(私が 明日 学校に 来るころには 先生は 学校に 居られるはずよー。)

: イジュンハズ ダリョットー。

(行くはず ですよー。)

: イジモットー。

(行っていらっしゃるよー。)

【未来の進行】

私が明日家を出るころには先生は学校に行っているだろう

mm(57) : ワガ アッシャ ガッコーッチ イキュンコロニハ センセーヤ ガッコーニ

イキュンドロー。

(私が 明日 学校に 行くころには 先生は 学校に 行くところー。)

: ムカトゥリョンドロー。

(向かってますところー。)

: モリカタダリョットー。

(いらっしゃりかたですよー。)

やはり「進行」には「～カタ」を付加することで「完了・結果」との意味を表しわけているようである。

【過去の完了・結果】

先生は昨日どこに行っていたのか

mm(57) : センセーヤ キヌー ダーッチ イジモタンヨー。

(先生は 昨日 どこに 行っていらっしゃったのー。)

: イモリショタンヨー。

(いらっしゃられたのー。)

: ダーチ ウリショタンヨー。

(どこに 居られたのー。)

【過去の進行】

先生は昨日どこに行っていたのか

mm(57) : センセーヤ キヌー ワントウ アタントウキヤ ダーチ イキュントロ

アリョタンカー。

(先生は 昨日 私と 会ったときは どこに 行くところ あったんですかー。)
: ダーチ イモリシヨントロ アリョタンカー。
(どこに いらっしゃられるとこ あったんですかー。)

「完了・結果」には「常態+イモリ」を使用するが、「進行」の意味には、「イモリ」を使用しない文例も表れてくる。

5.2. 「来る」の後項の「イモリ」

【現在の完了・結果】

先生が学校に来ている

mm(57): ナマ センセーヤ ガッコーニ キチュリョットー。
(今 先生は 学校に 来られてるよー。)
: ウリショットー。
(居られるよー。)

【現在の進行】

先生が学校に来ている

mm(57): ナマ センセーヤ ガッコーニ キチモットー。
(今 先生は 学校に 来ていらっしゃるよー。)
: ナマ ガッコーツチ ムカトウリョットー。
(今 学校に 向われているよー。)
: ムカトウンドロ ダリョットー。
(向かうところ ですよー。)
: センセーヤ ナマ クマチ チーモシュリョットー。
(先生は 今 ここに 来ていらっしゃられるよー。)

「来て居る」の「進行」の意味には、「～トロ」「～カタ」は付加しなくても「進行」があらわされるようである。

【未来の完了・結果】

私が家に帰るころには先生は家に来ているだろう

mm(57): ワガ ヤーツチ カエテイッチャントウキヤ センセーダカ ヤージ
ウリヨンコロ ダリョットー。
(私が 家に 帰って行くときは 先生は 家に 居られるころ ですよー。)

【未来の進行】

私が家に帰るころには先生は家に来ているだろう

mm(57) : ワガヤーッチ ムカトウントキヤ センセーモ ヤーッチ イキュンハズ

ダリョットー。

(私の家に 向かうときは 先生も 家に 行くはず ですよー。)

: ヤーッチ ムカトゥリョットー。

(家に 向かわれてるよー。)

: ムカトゥンコロ ダリョットー。

(向かうこと ですよー。)

: ヤーッチ チーモシュリョットー。

(家に 来ていらっしやられるよー。)

老年層と同じく「現在」「未来」「過去」の時間軸では形態は変わらないようである。しかし、やはり、老年層と比較すると「イモリ」の表れかたが減ってくる。

【過去の完了・結果】

先生は昨日学校に来ていた

mm(57) : センセーヤ キヌヤ チーモシュリョタットー。

(先生は 昨日は 来ていらっしやられたよー。)

: モシュリョットー。

(いらっしやるよー。)

「居る」の「イモリ」で使用している。

【過去の進行】

先生は昨日学校に来ていた

mm(57) : センセーヤ キヌヤ イキュンドロ ニョータットー。

(先生が 昨日は 行くところを 見ましたよー。)

: ムカトゥンドロ。

(向かうところ。)

以上、「来る」の後項に付く「イモリ」をみてきたが、中年層も「居る」の意味で「イモリ」を使用しながらも、前接する「来る」には「イモリ」を使用しない。

補助動詞の形態は「動詞の常態＋「居る」の意味のイモリ」のようである。

5.3. 主体変化動詞の補助動詞用法

5.3.1 「行く」「来る」以外の位置変化動詞

【「出る」の完了・結果】

先生が教室から出ている

mm(57) : ナマ センセーヤ キョーシツニワ ウリョランドー。

(今 先生は 教室には 居られないよー。)

: イジティモシャットー。

(出ていらっしやらないよー。)

: イジモティウリョランドー。

(出ていらっしやって居られないよー。)

【「出る」の進行】

先生が教室から出ている

mm(57) : センセーガ ナマ キョーシツラ イジュリヨントロー ダリョットー。

(先生が 今 教室から 出られたところ ですよー。)

【「入る」の完了・結果】

先生が教室に入っている

mm(57) : センセーヤ キョーシツニ チーモットー。

(先生は 教室に 来ていらっしやるー。)

: キョタットー。

(来られたよー。)

: ホキショタットー。

(入られたよー。)

【「入る」の進行】

先生が教室に入っている

mm(57) : ナマ センセーヤ キョーシツニ ホキショントロ ダリョットー。

(今 先生は 教室に 入られるところ ですよー。)

5.3.2 状態変化動詞

【「座る」の完了・結果】

先生が椅子に座っている

mm(57) : センセーヤ ナマ イスニ スワティモットー。
(先生は 今 椅子に 座っていらっしゃるよー。)

【「座る」の進行】

先生が椅子に座っている

mm(57) : センセーヤ イスニ スワローツチ シュントロ ダリョットー。
(先生は 椅子に 座ろうと されるところ ですよー。)

【「立つ」の完了・結果】

先生が立っている

mm(57) : センセーヤ タチモットー。
(先生は 立っていらっしゃるよー。)

【「立つ」の進行】

先生が立っている

mm(57) : ナマ センセーヤ タトーツチ シーモットー。
(今 先生は 立とうと していらっしゃるよー。)

【「死ぬ」の完了・結果】

先生が死んでいる

mm(57) : ナマ センセーヤ シジュリョットー。
(今 先生は 死んでますよー。
: シジモットー。
(死んでいらっしゃるよー。)

【「死ぬ」の進行】

先生が死んでいる

mm(57) : ナマ センセーヤ シノーツチ シーモットー。
(今 先生は 死のうと していらっしゃるよー。)

この項目では、無理に動詞を「完了・結果」と「進行」に分けた。非文の調査をするこ

とでどのような特徴が表れるか確認したかったためである。その結果、動詞の様を想定しやすいものには「イモリ」を「テ形」を介さずそのまま後接し、想定しにくい場合は「トロー」「カタ」など他の語で動詞の意味を補っているようだ。

5.4. 主体動作客体変化動詞の補助動詞用法

5.4.1 位置変化動詞

【「出す」の完了・結果】

先生が水槽から水を出している

mm(57) : センセーヌ スイソーラ イジャシバティリョタットー。

(先生が 水槽から 出してられましたよー。)

: センセーガ ムズバ ダシオワティリョタットー。

(先生が 水を 出し終わられたよー。)

【「出す」の進行】

先生が水槽から水を出している

mm(57) : センセーヤ スイソーラ ムズオ ダシモットー。

(先生は 水槽から 水を 出していらっしゃるよー。)

: ナマ ムズバ スイソーラ イジャシュントロ ダリョットー。

(今 水は 水槽から 出されたところ ですよー。)

【「入れる」の完了・結果】

先生が水槽に水を入れている

mm(57) : センセーガ ムズバ スイソーニ イリバティリョットー。

(先生が 水を 水槽に 入れしましたよー。)

: イリバタントロ ダリョットー。

(入れしたところ ですよー。)

【「入れる」の進行】

先生が水槽に水を入れている

mm(57) : イリュントロ ダリョットー。

(入れるところ ですよー。)

: イリトゥリョントロ ダリョットー。

(入れられるところ ですよー。)

5.4.2 状態変化動詞

【「開ける」の完了・結果】

先生が窓を開けている

mm(57) : ナマ センセーガ マドバ アケオワタントロ ダリョットー。

(今 先生が 窓を 開け終わったところ ですよー。)

: ホエオワリョタンドロ ドー。

(開け終わられたところ よー。)

: キューヤ センセーヌ マドバ ホエティン アリョリヤー。

(今日は 先生は 窓を 開けて あられるよー。)

【「開ける」の進行】

先生が窓を開けている

mm(57) : ナマ センセーヤ マドバ アケトウントロ ダリョリヤー。

(今 先生は 窓を 開けるところ ですよー。)

【「切る」の完了・結果】

先生が紙を切っている

mm(57) : センセーヌ カミバ キリオワタンドロー。

(先生は 紙を 切り終わったところー。)

: キリオワタンドロ ダリョリヤー。

(切り終わったところ ですよー。)

【「切る」の進行】

先生が紙を切っている

mm(57) : センセーヌ カミバ キチュントロ ダリョットー。

(先生は 紙を 切るところ ですよー。)

この項目では動詞に後接する「イモリ」はほとんどみられない。かわりに敬語助動詞を後接することで敬意を保っている。また、「完了・結果」には「終わる」の意味を、「進行」には「トロ」や「カタ」「ニシ」を付加することで意味を保っている。

5.5 主体動作動詞の補助動詞的用法

5.5.1 自動詞

【「走る」の完了・結果】

先生が走っている

mm(57) : センセーヌ ハシッチモタンカラ カオヌ ハーサリユン。

(先生は 走っていらっしゃったから 顔が 赤いです。)

【「走る」の進行】

先生が走っている

mm(57) : ナマ センセーヌ ハシッチモットー。

(今 先生は 走っていらっしゃるー。)

: ハシチモリヤー。

(走っていらっしゃるよー。)

: ハシッチモントロ ダリョットー。

(走っていらっしゃるところ ですよー。)

【「泳ぐ」の完了・結果】

先生が海で泳いでいる

mm(57) : センセーヤ ウミジ オジモシヤンジャヤー。

(先生は 海で 泳いでいらっしゃるよー。)

【「泳ぐ」の進行】

先生が海で泳いでいる

mm(57) : ナマ センセーヤ ウミジ オジモットー。

(今 先生は 海で 泳いでいらっしゃるよー。)

この項目の動詞では、動詞の様を想定しやすいものには「イモリ」を「テ形」を介さずそのまま後接し、想定しにくい場合は「トロー」など他の語で動詞の意味を補っているようだ。

5.5.2 他動詞

【「食べる」の完了・結果】

先生がご飯を食べている

mm(57) : センセーヤ ゴハンバ ミシヨリタリヤー。

(先生は ご飯を 召し上がったよー。)

【「食べる」の進行】

先生がご飯を食べている

mm(57) : ナマ センセーバ ミシヨティモツトー。

(今 先生が 召し上がっていらっしゃるよー。)

【「見る」の完了・結果】

先生がテレビを見ている

mm(57) : ナマンガリ センセーヤ テレビバ ニシモタリヤー。

(今まで 先生は テレビを 見ていらっしゃったねー。)

【「見る」の進行】

先生がテレビを見ている

mm(57) : ナマ センセーヤ テレビヤ ニシリョットー。

(今 先生は テレビを 見られてるよー。)

ニシモツトー。

(見ていらっしゃるよー。)

【「読む」の完了・結果】

先生が本を読んでいる

mm(57) : ナマンガリ センセーヤ ユディモシュリョタリヤー。

(今まで 先生は 読んでいらっしゃられたよー。)

【「読む」の進行】

先生が本を読んでいる

mm(57) : ナマ センセーバ ホンバ ユディモシュリョットー。

(今 先生は 本を 読んでいらっしゃられるよー。)

比較的「イモリ」が老年層と似た形で表れた。また、今までの項目と同じように、動詞の様を想定しやすいものには「イモリ」を「テ形」を介さずそのまま接合している。また「完了・結果」「進行」は過去形にするかしないかで表しわけようとしている。

5.6 その他の語に後接する補助動詞的用法

先生は結婚している

mm(57) : センセーヤ ケツコン シモツトー。

(先生は 結婚 していらっしゃるよー。)

先生は両親と顔が似ている

mm(57) : アノセンセーヤ オヤト カオヌ ニシモ^ンヤー。

(あの先生は 親と 顔が 似ていらっしゃるねー。)

先生の手が空いている

mm(57) : センセーヌ テヌ アシモ^ンヤー。

(先生は 手が 空いていらっしゃるねー。)

: センセーヌ テヌ アシリョットー。

(先生は 手が 空いてられるよー。)

このような状態の「～ている」表現には「イモリ」が老年層と同じように使用できるようだ。

以上、中年層における補助動詞用法をみてきたが、老年層の「イモリ」より使用範囲が縮小してきているのが分かる。また、「完了・結果」と「進行」を形態的に表わしわけようとする意識が老年層より強いようである。

終章 総括と課題

終章 総括と課題

本論文では、奄美方言における敬語動詞「イモリ」の本動詞の意味用法と補助動詞の意味用法を中年層と老年層に分け、世代間の使用実態を考察した。

敬語動詞「イモリ」は、「行く」「来る」「居る」の意味の尊敬語である。共通語の「～ている」表現の尊敬語「～ていらっしゃる」も「行く」「来る」「居る」の尊敬語であり、「完了・結果」「進行」の両方を同じ形態で表せる点でもよく似ている。しかし、今回の調査で「～ていらっしゃる」よりも、「イモリ」の方が「行く」「来る」「居る」の意味との結びつきが強いことが分かった。

具体的には、本動詞としての「行く」「来る」「居る」を、「～来た後、～へ行く」のように一文内で複数ある場合と、「行ってくる」などのように複合させた場合に分けて調査を行った。結果、老年層は「行く」「来る」「居る」がどの部分にきても、ほとんど「イモリ」で表すことができた。また、「行く」「来る」「居る」をそれぞれ辞書の意味分類に従い、「イモリ」の意味範囲を調べたところ、「行く」「来る」は基本的な「移動」の意味にのみ表れ、「居る」では抽象的な意味にも使用できることから、老年層における「イモリ」の基本義を「存在」とであると仮定した。

これらの結果より、老年層における「動詞＋（テ形＋）動詞」の形態の後項にくる「イモリ（居る）」は、原義を保ちつつ接合していると考え、補助動詞というより複合動詞の可能性が高いという結論に至った。また、もともと「完了・結果」「進行」を表すのに形態差がなかったが、動詞の種類によっては他の語を補うことで「完了・結果」「進行」の意味を表し分ける場合がある。

具体的には、その動作が想定しやすい場合は前項の動詞にそのまま「イモリ（居る）」を後接し、その形態で想定しにくい場合は、「完了・結果」の意味には「～オワリ（終わる）」を挿入し、「進行」の意味には「～カタ（～途中）」「～トロ／ドロ（～ところ）」「～ニシ（～ところ）」を補う形態をとる。

一方、中年層に対しても同じように調査したところ、本動詞では「行く」「来る」「居る」の中で「来る」が最も「イモリ」と結びつきが強く、「行く」「居る」は「イモリ」よりも「イキョットー」「ウリョットー」という敬意表現の形態を使用する傾向にあった³⁴⁾。また、一文の中に複数「行く」「来る」「居る」がある場合では、「来る」をほとんど「イモリ」で表すが、「行く」「居る」は「イキョットー」「ウリョットー」または常態の「イキョットー」「ウットー」で表していた。そして「行く」「来る」「居る」が複合している場合、「居る」が後項にくると「イモリ」で表すが、前項は常態のままである（例：「行ってくる」→「イジモットー」）。

このような中年層の傾向は、奄美方言だけの変化ではなく、全国的にも「いらっしゃる」

³⁴⁾ 本論の中で「行為主体への敬態表現」という用語で表した敬意表現をさす。

相当の動詞の意味が縮小し、「来る」に集束する傾向があるようだ³⁵⁾。また、中年層の「居る」は本動詞の意味範囲も、基本的な意味での使用でも「イモリ」との結びつきが弱いと思われる。したがって、「動詞＋（テ形＋）動詞」の形態の後項にくる「イモリ（居る）」は、原義を抽象化し接合していると考え、補助動詞化しているという結論に至った。そして、中年層は急速な共通語化の流れの中で、本動詞としては「来る」と「イモリ」を結びつけながらも、補助動詞としては「居る」に「イモリ」を使用するという複雑な変化を遂げつつある。中年層の「イモリ」の用法は、共通語の「～ていらっしゃる」と似ている。

中年層の「イモリ」は補助動詞化しているので、品詞のレベルで文法化しているが、「イモリ」の原義を抽象化し、尊敬の意味を付加させるために形式的に使用する傾向があるため、敬語の観点からも「尊敬語」から「美化語」「丁重語」へと文法化していると考えられる。

本論文では、敬語動詞「イモリ」の本動詞用法から補助動詞用法の変遷を、「行く」「来る」「居る」と「イモリ」の意味用法との関係から判断し、論を組み立てた。共時態の中で世代差を扱い、「イモリ」一語がさまざまな条件の中でどのような形態をみせるか、得られた文例を形態別に示したので、より生活実態に近い表現が概観できたと思われる。

一方、調査を行いながら世代差や男女差などの位相面では分けられない、方言習得レベルの段階による違いがあることを実感した。また、共通語による質問票を作成し、それを方言に翻訳してもらう調査方法であったため、単に質問文に合わせて語彙を方言に置き換えた可能性もある。他にも、今回の調査では場面設定において聞き手を「親しい友人」、第三者を「校長先生」として設定したが、60代あたりから第三者敬語として「イモリ」を使用しなくなる傾向があるため、対者敬語と第三者敬語の区別を考慮しなかったことなども課題として挙げられる。

そして、なぜ「イモリ」の意味が「来る」に集束していくのか、「テ形」を介する形態と介さない形態とではどのような意味の差があるのかについての問題や、中年層の補助動詞用法の中で「イジモットー（行っている）」の意味が龍郷町方面では「完了・結果」を、笠利町方面では「現在の進行」を表すという地域差の問題など、共通語や他の方言でも研究されている問題もあり、今回の調査だけでは判断しかねるものも多くあった。

全体としての調査方法や表記方法の見直しはもちろんのこと、イントネーションやアクセントの面から語の結合を考察すると、また違った結果が得られるかもしれない。

しかしながら、この変化は方言が使用できる話者に限っての変化であり、急激な共通語化が起こっている現在、若年層は「イモリ」という単語すら知らない世代であるので、この用法は衰退していくいのだろう。

奄美方言は、危機言語の一つであり、記述・録音が急がれている。また、一問一答の質問票ではなかなか実態を把握することは難しいため、長期間の自然傍受法による資料を多

³⁵⁾ 注 30 参照。

く集め、場面差も考慮した記述を目指したい。談話による場面差の研究としては、町他(2007)が4世代にわたり場面を限定した会話形式で奄美各島を比較することを目指している。このように、場面を設定し、各世代に談話形式で会話をしてもらう調査も行う必要があるだろう。また、伝統方言に重点を置いた研究だけではなく、現在中年層以下で使用されている「奄美共通語」「トン普通語」と呼ばれる中間方言についても取り上げていきたい。

今後、場面を限定した談話による調査や長期に渡る自然傍受法により活きた例文を集めながら、今回得られた現象の考察を深めていきたい。また、同じ敬語動詞である「ミシヨル」や「オセル」との関係を通して、当該地域の待遇表現がどのような独自性を持ち、共通語化の中でどのような変遷をみせるのか、中間方言にも視野を広げながら研究を進めたい。

激しい言語変化である奄美方言の特徴をさらに詳細に調べることで、言語変化のメカニズムの解明や敬語体系について寄与できるところがあると考えられる。

参考文献

- 浅山友貴(2005)「補助動詞の尊敬語の形式をめぐって」『慶応義塾大学 日本語・日本文化教育センセー紀要 日本語と日本語教育』33
- 有本光彦(2007)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房
- 有元光彦(2007)「方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象」「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2) No.16520281 研究報告書
- 安平鎬・福嶋健伸(2005)「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系—存在型アスペクト形式の文法化の度合い—」『日本語の研究』第1巻3号
- 青木博史(2005)「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』第1巻3号
- 飯豊穀一・日野資純・佐藤亮一(1986)『講座方言学9 —九州地方の方言—』国書刊行会
- 石井正彦(1987)「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化—」『方言研究年報 方言接辞の研究』第30巻 広島方言研究所
- 泉基博(1997)「『十訓抄』の敬語—補助動詞「侍り・候ふ」—」『語文』69号
- 伊豆山敦子(2005)「琉球語 i—(自動詞する)の文法化—文字資料の無い言語の研究例—」『日本語の研究』第1巻3号
- 市之瀬敦(2007)「言語接触からクレオール語へ」『月刊言語』36—9
- 井上史雄 [ほか] 編(2001a)『日本列島方言叢書 琉球方言考 1 琉球列島一般[総論・言語地理学]』ゆまに書房
- 井上史雄 [ほか] 編(2001b)『日本列島方言叢書 琉球方言考 2 琉球列島一般[文法]』ゆまに書房
- 井上史雄[ほか]編(2001c)『日本列島方言叢書 琉球方言考 3 琉球列島一般[音韻・アクセント・語彙・社会言語学]』ゆまに書房
- 井上史雄 [ほか] 編(2001d)『日本列島方言叢書 琉球方言考 4 奄美属島』ゆまに書房
- 井上史雄 [ほか] 編(2001e)『日本列島方言叢書 琉球方言考 5 奄美大島他・沖縄属島』ゆまに書房
- 井上史雄 [ほか] 編(2001f)『日本列島方言叢書 琉球方言考 6 沖縄本島』ゆまに書房
- 井上史雄 [ほか] 編(2001g)『日本列島方言叢書 琉球方言考 7 先島[宮古・八重山他]』ゆまに書房
- 岩倉市郎(1932)「喜界島に於ける敬語法」『旅と伝説』第5年 第2号
- 岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』中央公論社
- 大西正幸(2007)「琉球語の総合的な記録と記述にむけて(講演メモ)」沖縄言語研究センター
- 大堀壽夫(1998)「Workshop Series 6 *Studies in Japanese Grammaticalization* —Cognitive and

Discourse Perspectives—」くろしお出版

大堀壽夫(2004)「文法化の広がりと問題点」『月刊言語』33-4

大堀壽夫(2005)「日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—」『日本語の研究』

第1巻3号

岡村隆博(2007)『奄美方言～カナ文字での書き方～』南方新社

沖裕子(2000)「アスペクトからみた動詞分類再考—「気づかれにくい方言」にふれて—」

『信州大学人文科学論集』34

亀井孝・河野一郎・千野栄一編(1992)『言語学大辞典 第4巻 世界言語編(下-2)』三

省

かりまたしげひさ(2007)「これまでの琉球方言研究、これからの琉球語研究」沖縄言語研究

センター資料 162

金城朝永(1931)「南島方言に於ける敬語法」『旅と伝説』第4年 第12号

金水敏(1982)「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」『国語と国文学』12

月号

金水敏(2004a)「日本語の敬語と歴史と文法化」『月刊言語』33-4

金水敏(2004b)「近代日本小説における「(人が) いる／ある」の意味変化」『待兼山論叢』

第38号

金水敏(2005)「日本語敬語の文法化と意味変化」『日本語の研究』第1巻3号

金水敏(2006)『日本語研究叢書 第2期第3巻 日本語存在表現の歴史』ひつじ書房

工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学 人文学会雑誌 堀田要治教授記

念号』第13号 第4号 武蔵大学人文学会

工藤真由美(1991)「過去の出来事の表現—テンス・アスペクト体系とその機能—」『横浜国

大 国語研究』第9号

工藤真由美(2000a)「アスペクト・テンス体系と極性」『現代日本語研究』第7号 大阪大

学 大学院 文学研究科 日本語学講座

工藤真由美(2000b)「方言のムードについてのおぼえがき」『待兼山論叢』第34号 大阪大

学大学院文学研究科

工藤真由美・清水由美(2003)「アスペクトと敬語—岐阜県高山方言の場合—」『阪大日本語

研究 15』大阪大学 大学院 文学研究科 日本語学講座

工藤真由美(2004a)「ムードとテンス・アスペクトの相関性」『阪大日本語研究 16』大阪大

学 大学院 文学研究科 日本語学講座

工藤真由美(2004b)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 標準語研究を超えて』ひつじ

書房

工藤真由美(2007)「複数の日本語という視点から捉えるアスペクト」『月刊言語』36-9

国広哲弥(1979)『ELEC 言語叢書 構造的意味論』三省堂

国広哲弥(1979)『ELEC 言語叢書 意味の諸相』三省堂

- 倉井則雄(1987)『トン普通語処方箋』倉井則雄
- 下地賀代子(2006)「多良間方言の動詞連体形のテンス・アスペクト」『琉球の方言 30 号』
法政大学沖縄文化研究所
- 下野雅昭(1982)「奄美大島における待遇表現の地域差—文表現の言語地理学—」『日本方言
研究 会第 34 回発表原稿集』
- 渋谷勝己(2005)「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』第 1 巻 3 号
- 小林憲次(2005)「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』第 1 巻 3 号
- 佐藤知己(2007)「アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照」『日本語学』26-3
- 鈴木英夫(1998)「規範意識と使用実態—「(人が) ある」と「(人が) いる」を中心として」
『日本語学』17-5
- 鈴木裕史(2005)「『竹むきが記』の客体尊敬語—補助動詞「—きこゆ」「—たてまつる」—」
『国学院雑誌』第 106 巻第 2 号
- 須田義治(2007)「現代日本語のアスペクト研究」『日本語学』26-3
- 高橋俊三(2005)『与論方言辞典』武蔵野書院
- 辻加代子(2001)「京都市方言・女性話者の「ハル敬語」—自然談話資料を用いた事例研究—」
『日本語科学』10 56-79
- 辻加代子(2002)「京都市方言・女性話者の談話における「ハル敬語」の通時的考察—第三者
待遇表現に注目して—」『社会言語科学』第 5 巻第 1 号
- 寺師忠夫(1985)『奄美方言の文法』根元書房
- 陳君慧(2005)「文法化と借用—日本語における動詞の中止形を含んだ後置詞を例に—」『日本語の
研究』第 1 巻 3 号
- 仲宗根政善(1987)『琉球方言の研究』新泉社
- 長尾光之(1969)「「与」と「給」の問題点—「与」の補助動詞化の過程を中心に—」『集刊東
洋学』21 号
- 長田須磨 須山名保子(1981)『奄美方言分類辞典 上巻』笠間書院
- 長田須磨 須山名保子 藤井美佐子(1980)『奄美方言分類辞典 下巻』笠間書院
- 中本正智(1981)『図説琉球語辞典』力富書房
- 日本国語大辞典刊行会編(1993)『日本国語大辞典 第 2 巻』小学館
- 野村剛史(2003)「存在の様態—シテイルについて—」『国語国文』第 72 巻 第 8 号
- 野村剛史(2004)「近世スタンダードの動詞アスペクト」『月刊言語』33-4
- 野村益寛(2007)「認知言語学から見た日本語アスペクト」『日本語学』26-3
- ハイコ・ナロック(2005)「日本語の文法化の形態論的側面」『日本語の研究』第 1 巻 3 号
- 日高水穂(1997)「授与動詞の体系変化の地域差—東日本方言の対照から—」『国語学』190
集
- 日高水穂(2003)「「のこと」とトコの文法化の方向性—標準語と方言の文法化現象の対照研
究—」『日本語文法』第 3 巻 1 号

- 日高水穂(2005)「方言における文法化—東北方言の文法化の地域差をめぐって—」『日本語の研究』第1巻3号
- 日高水穂(2006)「地域言語・方言」『日本語の研究』第2巻3号
- 日高水穂(2006)「文法化の地域差—「のこと」からコト・トコ類への文法化と地理分布—」『日本語学』第25巻
- 姫野昌子(1999)『ひつじ研究叢書(言語編) 第16巻 複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 百留康晴(2001)「動詞連接から複合動詞へ—「一入る」の補助動詞化を中心に—」『文藝研究』第152集 日本文芸研究会
- 平山輝男編(1986)『奄美方言基礎語彙の研究』角川書店
- 福嶋健伸(2000)「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて—動詞継続を表している場合を中心に—」『筑波日本語研究』6号 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学
- 福嶋健伸(2001)「中世末期日本語のウチ(ニ)節における～テイルと動詞基本形—状態化形式の文法化をめぐって—」『筑波日本語研究』6号 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学
- 藤原与一(1978)『昭和日本語方言の総合的研究 第1-2巻 方言敬語法の研究』春陽堂
- 日野資成訳 (2003)『文法化』九州大学出版会 (著者 P. J. ホッパー、E. C. トラウゴットー)
- 平山輝男(1986)『奄美方言基礎語彙の研究』角川書店
- 廣瀬裕子「動詞「おく」の文法化のメカニズム—本動詞「おく」と補助動詞「～ておく」の意味的関連性—」
- 保坂道雄「文法化：意味変化と総語変化」『国際関係学部研究年報』第21集
- 堀江薫(2005)「日本語と韓国語の文法化の対照—言語類型論の観点から—」『日本語の研究』第1巻3号
- 町博光(1984)「西表島舟浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要』第19号
- 町博光(1997)「鹿児島県大島郡与論島朝戸方言の待遇表現」『方言資料叢刊 第7巻 方言の待遇表現』方言研究ゼミナール
- 町博光(2000)「琉球方言の対者待遇発想の表現」『日本語学』19
- まつもとひろたけ(1982)「奄美方言の動詞結果相の問題点—喜界島大朝戸方言—」『琉究の言語と文化』
- まつもとひろたけ(1993)「〈シテアル〉形のおぼえがき—奄美喜界島(大朝戸)方言から—」『国語研究』松本明先生喜寿記念会編 明治書院
- まつもとひろたけ(1996)「奄美大島方言のメノマエ性—龍郷町瀬留—」『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』鈴木泰・角田太作編 ひつじ書房
- 水谷美保(2004)「方言敬語動詞に共通して生じる意味領域の変化」『待兼山論叢』第38号

大阪大学大学院文学研究科

水谷美保(2005)「「イラッシャル」に生じている意味領域の縮小」『日本語の研究』第1巻4号

三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』第1巻3号

森山由紀子(2006)「日本語における対者敬語の成立—『古今和歌集』詞書にみる「ハベリ」文法化の過程—」『語用論研究』第8号

村田明(2001)「本動詞「いく」,「くる」と軽動詞「いく」,「くる」の意味分析」『信州大学留学生センター紀要』第2号

山田巖(1966)「今昔物語集における敬語—下二段補助動詞「給ふ」について—」『解釈と教材研究』11巻8号

資料

奄美方言における敬語意識アンケートの結果
2007 年 11 月に行った調査結果

資料については、現物閲覧のみとしリポジトリ公開は致しません。